

清水東神社誌

「清水東神社誌」 発刊にあたって

私たちのふるさと清水東地区には、集落毎に神社がひっそりと佇んでいます。

いにしえより、村の鎮守の神様は人々が尊崇する対象であり、一方では村の守り神として、五穀豊穡・家内安全を願う人々にとって実に身近な存在でした。

今日でも神社は村祭りや初詣・厄払い・神輿渡御・左義長といった地域の風物詩となる伝統行事で親しまれ、私たちの生活に密着しています。

こうして神社は古来より地域の人びとが刻む歴史とともに歩んできましたが、私たち住民は村の神社についての由来や御祭神等について深く知っていないのが大方の現状ではないでしょうか。

清水東公民館社会部は地域の神社に関する貴重な資料を保存・伝承することを企画しましたが、幸いにも地域の歴史アドバイザーの方々の協力を得て、これまで度重なる会議と研究を重ね、ようやくにして神社誌として纏めることができました。

この事業にご協力をいただきました関係各位に深く感謝します。

この神社誌が私たちが住む村の歴史を知る機会となり、更には郷土愛へと繋がっていくならば幸いです。

平成二十八年二月

福井市清水東公民館社会部

委員長 宮永 節子

目次

「清水東神社誌」発刊にあたって
清水東地区神社マップ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
上天下 村のおいたち・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
鍵岡神社・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
下天下 村のおいたち・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
加茂神社・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
小羽 村のおいたち・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
今井神社・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
三留 村のおいたち・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
氣比神社・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
杉谷 村のおいたち・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
白山神社・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
田尻栃谷 村のおいたち・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
春日神社（栃谷）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
春日神社（田尻）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
竹生 村のおいたち・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
丹生神社・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54

清水 村のおいたち・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
八幡神社・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
和田 村のおいたち・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67
春日神社・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68
各神社の祭神名・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75
冊子に記載の主な天皇・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85
関連信仰について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87
神社関連信仰施設・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 92
神社に係る言葉辞典・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 97
冊子に出てくる年号と時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 103
東地区の世帯数・人口の推移・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 105
編集委員他
編集後記

清水東地区神社マップ



上天下 村のおいたち

上天下は、山を背にして東南に広がる田畑を持ち、自然に恵まれた村である。谷向かいの奥からは豊富な清水が湧き出て大昔からこの湧水近くに住みつくようになった。谷向かい垣内は最も早く家が建てられたところで山の中腹に昔の屋敷跡が残っていて、江戸時代には村の中心地であった。また村の西端、石川次三郎家の北西の丘陵上にも集落がごく最近まであり、昔の屋敷跡の石垣・村道が残っている。この付近は志津川の氾濫で水がよくつくので高い丘の上に住居があり、大森出村からの道もこの丘の上を通っていた。

志津川が村の南を流れていたので水害に悩まされ、堤防構築に長い年月村を挙げて汗を流し、洪水のたびごとに堤防が切れ漸く実った稲が泥水をかぶって飯米にも事欠く年が多かった。このため洪水の恐れのない法谷・谷あい・谷向等の山田は恵みの田であった。言い伝えによると、上天下村は元法谷の西北の奥地に村があり「西谷村」と呼ばれていたが、中世以前に現在地に移り住んだという。

なお。「法谷」は仏法を説くお寺があつたと思われる。(青木先生の説)

上天下村 公領 高三百六拾六石二升

昔ハ、西谷村ト云イシコトアリ。天保以前迄ハ種々ノ藩主ノ領分ナリシモ、天保時代ヨリ本保領トナリ維新ニ及ビタリ。此ノ地ハ地割慣習にて二十年毎に地割りヲナシクジビキ二十五石ヲ以テ一本トシ行ヘリ。云々

出村

枝村ともいい朶村とも書く。『越前国名蹟考』巻ノ三に「西尾領 上天村 朶 土橋」と書かれてあり、上天村に「土橋」という出村があつた。現在の「土橋」の姓はこの出村の名をとつたものと思われる。



鍵岡神社（上天下町三七―二二―）

由来 明治初年の村明細帳に「長田第三六番地に村社鍵岡神社あり。祭神経津主命（フツヌシノミコト）、往古は志津川の上流大森字腰巻内の接続志津の庄、賀茂山の端に鎮座ありたる由の処、数日降雨出水の際山崩れ落ちて漂流し来るを、当村の万作なる者鍵を以って引き止めたる由、古老の口碑に存す」と書かれてある。

この長田三六番地は村の中央南の水田の中の丘にあり、そこには一〇〇本余りの杉の木がこんもり茂った森の中に「鍵堂」と呼ばれるお堂があり、神様が祀られてあった。参拝にも便がよく村人の信仰の中心であった。大正八年にこの杉の森が日陰になるので神社を移転することになり、大正九年に三七字高峰に遷座された。この場所は薬師如来が安置されていた薬師堂の場所である。

また、『地名考』にも「享保元年（西暦一七一六・・・以後西暦は略す）大森賀茂神社の中、三社の三尊大風雨にて洪水の際当地まで流れ来りたる時、万作なる者はれを留め、赤はだ山の突出たる端に小さい堂を建立したり。享保一六年（一七三一）一〇月二九日更に建築し鍵岡大明神と名付けたり。」と書いてある

大正九年八月九日同字赤井谷の少名彦命（スクナヒコノミコト）を祀る無格社赤井谷神社境内へ移転。

同年一〇月八日赤井神社を本社に合祀。現在の拝殿は平成二年に新築。

祭神 経津主命 本地仏

聖観音立像（三五センチメートル）

聖観音座像（四〇センチメートル）

阿弥陀院の薬師如来立像（五五センチメートル）

を合祀

祭礼 春祭 四月一日

秋祭 九月十八日

境内 二反四畝二歩

本殿 間口九尺 奥行八尺 昭和四年新築。棟梁 仲井金十朗

大工 藪定一・江尻豊作・土橋喜之助。御厨子のほか神鏡は昭和二五年厄年男
女一三人が奉納。

拝殿 間口・奥行ともに二間半 大正八年遷座の折、元長田の鍵岡神社より移築、

氏子 四九戸

宮司 広部重紀

鳥居・灯籠 享保四年に石川家の祖石川孝勝がこの薬師堂の鳥居を寄進した。当時は

神仏習合の慣習であったので、仏と神と混淆して礼拝していた名残りである。

鳥居の額には「薬師」と書いてあり、鳥居石柱には奉□文□□□諸願成就皆念

□□□。石柱には享保□四□己亥益夏吉展石川孝勝」と彫られている。

上の鳥居は、元赤ハゲ山にあった鍵岡神社の鳥居で石川孝勝が享保四年（一七一九）に寄進したもので額には「鍵岡大明神」と書いてある。大正八年現在地に移った時この鳥居も移転した。

この時灯籠一對も寄進したが破損し、境内下広場清水の脇に径二五センチ、高さ五〇センチメートル円筒形の灯籠片が残っている。この残欠部分に「奉献石灯籠 享保四己亥歳卯月吉展 孝勝一雙敬白」と書いてある。



鍵岡神社拝殿

一の鳥居は平成一一年九月建立、二の鳥居は一〇年九月に建立（旧鳥居が破損した為）

絵馬 奉納絵馬大・中・少三枚。「奉掛御宝前文化四年（一八〇七）」「安政六年（一八五九）中井熊吉」の二枚は銘文が判読できる。

幟棹 （アルミ円柱製） 一対は平成二〇年七月に建立

御神輿

昭和五十一年に天守会（天下を守る会）会員の篤志によりみこしと子どもみこしを会員の手により作製奉獻された。その後、毎年秋の祭礼には氏子総出でみこし御渡りを行ない大変にぎわうようになった。

薬師堂

現在の鍵岡神社には、薬師堂の本尊薬師如来立像（像高五五センチメートル）が一体、鍵岡大明神御厨子の向って左側に合祀されている。この薬師如来は、元上天下村端の天台宗阿弥陀院の仏像の一部で、天正年間織田信長の兵火にかかって阿弥陀院が焼き亡ぼされた折、住職の御内仏としていたこの薬師如来だけ山上に置いて逃げたという。後、この山腹に堂を建て安置し「薬師堂」と称し崇敬したと伝えられている。元は現在の鍵岡神社の横に、一間四方の堂が建てられてあり、金色の薬師如来が安置されていたが、建物が破損し危険となったため、鍵岡神社に合祀し今日に至っている。

阿弥陀院寺跡

前述のとおり、上天下の北の端赤井谷の山裾に、阿弥陀院があつた。天正年間（一五七三～一五九二）織田信長が一向一揆征伐の折焼かれたと伝えられている。しかしこれは天正二年（一五七四）六月十八日正午を期して一揆勢が一向宗以外の寺院に火を放った時、上天下阿弥陀院も焼き亡ぼされたと思われる。その際住職は日夜信仰していた薬師如来像を山上に移して逃げ去ったと伝えられている。この寺院跡の畠からは折々灯籠の破片などが出土すると言われている。

地蔵菩薩立像石仏

道音の墓の隣に地蔵尊がある。正徳五年（一七一五）に建立されたもので、「諸願成就令是」と彫まれてあつて、涼清院貞心大姉の法名の字があり、石川庄兵衛家のものである。（谷口建一宅 右前）

地蔵菩薩坐像石仏

右の地蔵尊の横に高さ三〇センチメートルの位の地蔵尊が安置してある。昔、赤井谷の地にあつた善太郎の「はたおり娘」が亡くなつたので地蔵様を作つた。それを自分の家の辻わきに安置して供養をしていた。其の後、現在のところに移転安置したものである。

白山大権現の石柱

上天下の後ろ山の峯に、山道が交差している所があつて、村の人は「四ツ辻」と呼んでいる。四ツ辻から北へ五〇メートルの道の脇に、高さ六〇センチメートル位で、二〇センチメートル角の石柱が立っている。道に立つて読むと「白山大権現」と刻まれてある。そのままの位置で遠く東の方を望めば、雪をいただいで輝く白山の霊峰を仰ぐことが出来る。芦野喜義家の曾祖父の建立によるものである。裏には「越前国上天下村庄屋芦野喜左工門」と刻まれている。

・経津主命……刀劍の威力を神格化した神

・少名彦命……医療の神、医薬の神



鍵岡神社絵馬

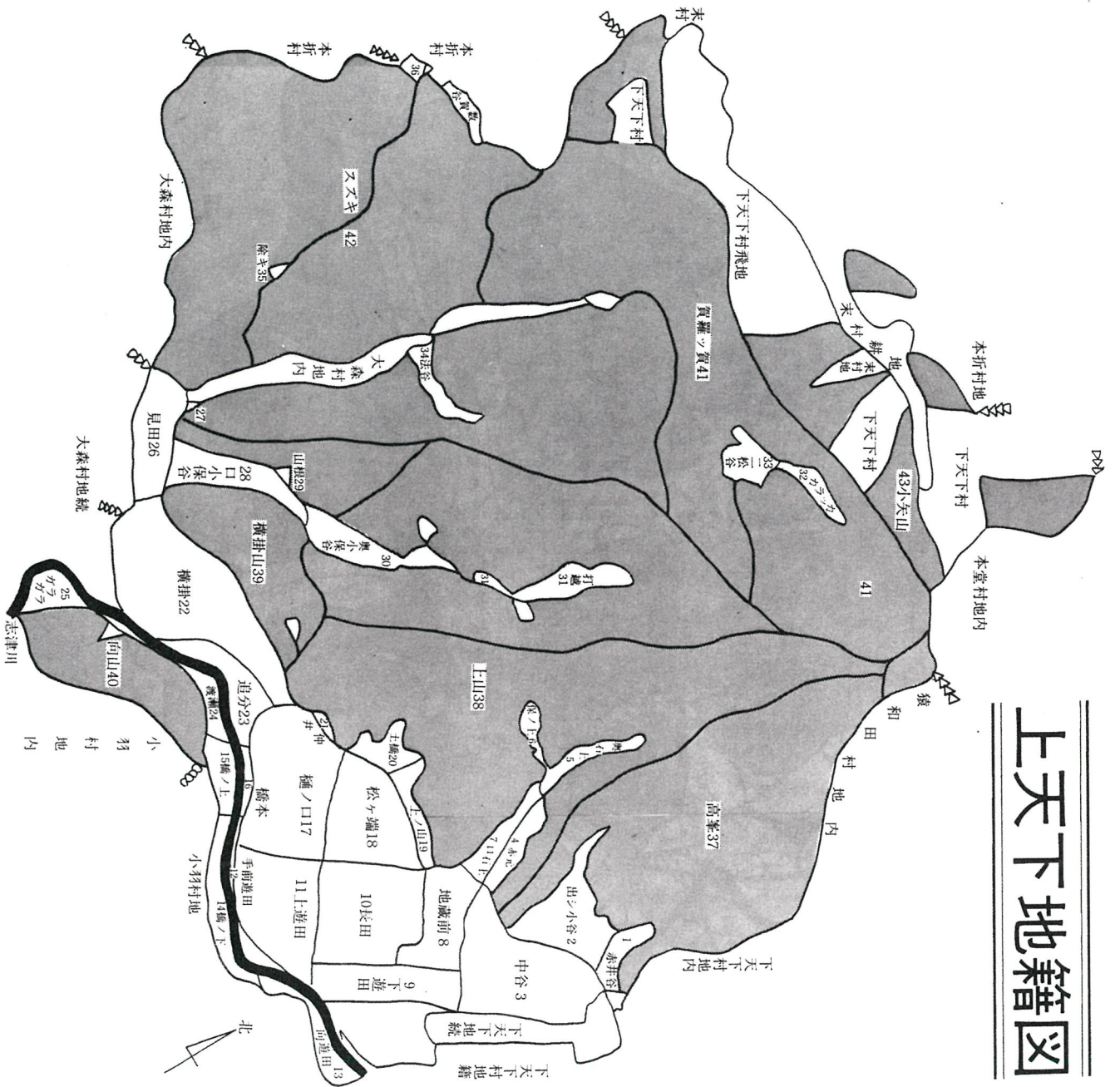


鍵岡神社絵馬



秋祭りお神輿

上天下地籍図



下天下 村のおいたち

下天下の地名の由来は定かではない。公の記録で地名を尋ねると、「慶長絵図」には三留郷手賀村とあるが貞享二年（一六八五）に「越前国絵図と同時に書かれた『越前地理指南』の「無旧記村々」の中に初めて下天下の地名が現われ、明治三五年（一九〇二）井上翼章編の『越前国名蹟考』巻三には西尾領（現愛知県西尾市）として、石高四〇二石五斗八升と記録されているに過ぎない。従って天下という地名の由来は不明であるが、ここで考えられることは「天下」は「天蛾」に通じることから、我々の祖先は昔から養蚕を生業としていたのではなからうか。若し、そうであるならば「越知山大谷寺文書」の中の「御神領、坊領目録」によると、天下には、尾羽、三留、猿和田などと共に、大谷寺の寄進田があり大谷寺は養蚕、塩の専売権を持っていたらしく、養蚕の上分銭を徴集した代りに毎年、時の越前守護である朝倉家へ、三月に五貫文、六月に五貫文ずつ納所金として納めたと言う記録があることからみても天下は殿下（現糸生）と共に養蚕製造の盛んな所という意味で天蛾に因んで「天下」と呼ばれるようになったと考えることが出来る。

なお、「越知山大谷寺縁起」の中に天賀とは「古記に曰く養種の天より降りたる所を天賀という」と書かれていることから、蚕と地名の関連があるように思われる。

ではいつ頃に「天下」と書かれるようになったのか、これもむろん今の我々には知るすべもない。

しかし福井藩主松平春嶽公の「美雪草子」、の中に、八代將軍吉宗「有徳公」が幼時江戸藩邸に在った時越前の「天下村」を領地にした。後で將軍になった時「全くこれ將軍となる吉兆であった」と言って喜んだと記されている。

天下村が「有徳公」の領地であった期間は元禄一〇年（一六九七）から宝永二年（一七〇五）までである。現在のよう「天下」が「下と上」に分かれて呼ばれるようになったのは恐らく平安初期であろう。

また、毎年、暮の一二月になると、神社当番の担当者で立派な新しいしめ縄を作っている。手作りなので、形や大きさが毎年少しずつ違うが、掛けなおすと立派なしめ縄となる。



加茂神社 (下天下町二一五)

由来 勧請年月など不明

なお、勧請当時の社殿は八王子地籍一四番地二(面積七五坪)にあったが、いつごろ現在地に移転されたか年月は明らかでない。

「八王地」の「地」はおそらく「八王子」と書き、滋賀県の天台宗延暦寺を守る日吉大社の第四社の八王子神だと思われる。(青木先生の説)

祭神

建若雷命 たけわかいかずちのみこと 玉依比賣命 たまよりひめのみこと (以下、五社神社と呼び五社合祀)

稲荷大明神 本地仏 稲荷

白山大権現 本地仏 十一面観音

加茂大明神(中央) 本地仏 阿弥陀如来

春日大明神 本地仏 聖観音

天満宮大明神 神像 天神 菅原道真

祭礼 春祭 四月二〇日 秋祭 九月二〇日

社殿 本殿 間口 一〇尺 奥行 十三尺五寸(屋根 銅版葺) 昭和五一年以前は瓦)

拝殿 一八尺四方(昭和五一年改築)

氏子 三八戸

宮司 広部重紀

観音堂

(下天下水風呂谷三三二九の三)

祭神 十一面観音菩薩(立像) 高さ六五センチメートル(室町後期の作風)

往古、聖徳太子がこの越の国を巡行された折、自らこの立像を彫って弟子に安置を命じられたものと伝えられる。

社殿 二・九メートル四面(銅版葺) 貞享二年(一六八五)三月一八日改築

氏子 町内に住む宮永姓全戸(現在一五戸)

祭礼 例祭は一〇月七日。その時は氏子全戸で境内の大掛かりな清掃奉仕をし、また神官による祭祀は毎年四月二〇日に行われる。

地藏堂

(下天下字八王子、二六の二七番)

由来 不明

祭神 地藏菩薩座像(木像) 江戸時代初期の寛永年間の作

祭礼 九月二〇日 絵馬の奉納は 天保一四年(一八四四)五月吉日

氏子 一四戸

社殿 三・二メートル四面(瓦葺) 以前の堂は、天保三年(一八三二)八月二〇日に再建(棟梁

中井金右衛門)、現在の御堂は、平成元年九月二〇日改築 棟梁 福井市 酒井孝一

社地 一二〇坪



地藏堂



観音堂

庚申塔 (元禄二年 横山庄太夫家祖先 任海が寄進した塔)

加茂神社拝殿脇の東側に庚申塔が祀つてある小さな祠がある。元から長く拝殿内に安置してあったので、風化した跡もなく、年代も新しいような笏谷石の塔であるが、造られた時代は元禄二年(一六八九)春四月と刻まれてある。元来庚申塔思想は中国から入った一種の民間信仰で特に旧幕時代に関東、東北などが盛んであったようだが、真宗王国である越前での信仰は珍しいものとされる。

六道地藏尊

昭和一〇年一月建立

建立者 宮永喜之助

横山庄太夫

菅谷仁左衛門

横山與四郎

敷地提供者 宮永傳太夫

六体地藏、六地藏ともよばれ、六道の辻に立って冥土の苦しみを救う仏である。六道とは、地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天上の六つの苦難にみちた世界のこと、六つの苦難の辻・わかれ道に立てられ、迷っている者を助けるため、墓地の入口・寺院の入口、村の辻などに多く立てられている。仏陀が去って、弥勒菩薩が現われるまでの「無仏時代」「末法」「不安時代」に無間地獄へおちる者を、地藏さんが地獄の主宰者閻魔天に乞うて、罪人を現世に還らせるといふ地獄の救世主である。

このように末法思想による衆生済度に地藏菩薩が活躍されるわけで、地獄の底をいそがしく歩き回るため、出家行脚の姿をして、左手の如意宝珠(意のままになる宝の珠)をもち、右手には悪をくじく錫杖をもっている。



六道地藏



庚申塔



加茂神社拜殿



地藏堂絵馬

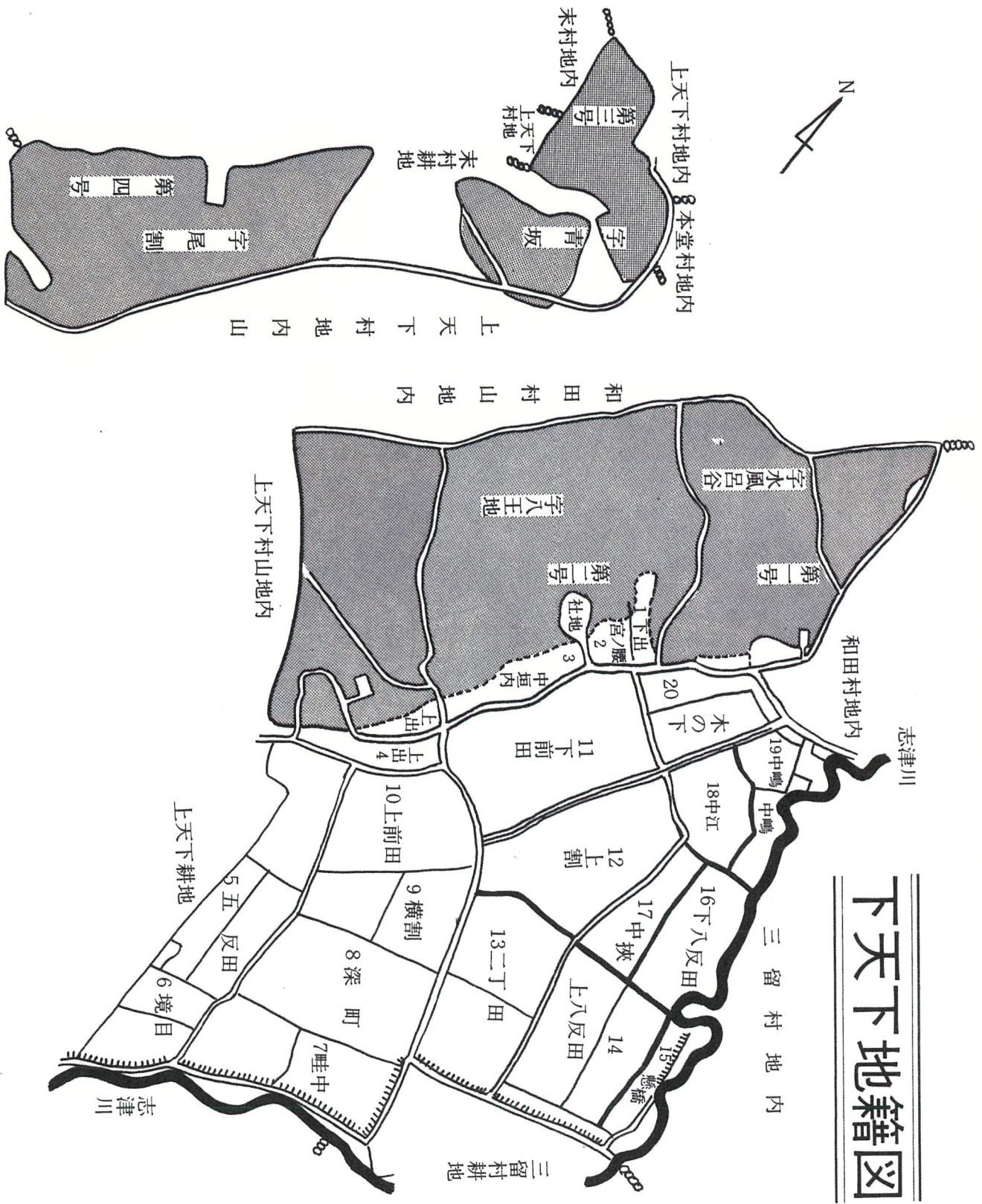


加茂神社絵馬



加茂神社絵馬

下天下地籍図



小羽 村のおいたち

志津川右岸に位置し、東北は小丘御城山、東は小丘陵御墓山、西は丹生山地東縁で、通称がらから山丘陵。御城山丘陵上に、四世紀後半～五世紀前半に比定される全長四四メートル・後円部径二五メートル・前方部すそ幅二一メートルの前方後円墳がある。西の丘陵縁に弥生後期～古墳中期の集落跡である小羽遺跡が存在し、土器・木器・種子などの遺物が出土した。西縁の丘陵上に九基の円墳が確認される。経一〇メートル前後、かつては二〇数基あったと伝える。字三味平からは奈良期末～平安期の須恵器が散見される。

このように、弥生時代の土器が出土している点、また通称「後山」（お城山）に前方後円墳が確認されていることと合せ考えると、かなり権威を持った首長一族が住んでいたと考えられ、風巻とともに古くから開けた村といえよう。小羽には「今井」「谷神」「三味平」「御墓山」といった地名があり、過去に宗教に關係する遺跡があったと思われる。（青木先生の説）御城山（後山）頂に前方後円墳の後円部を一部改築した中世の山城がある。木曾義仲の乳兄弟今井四郎兼平が三年居城したと伝える。戦国期に見える村名。越前国丹生北郡のうち、享禄二年（一五二九）五月の越知山大谷寺神領坊領目録（越知神社文書）に「在所尾羽村」として七反の大般若田と八反の陀羅尼田が記されている。又、冬の農閑期には副業として村中あげて菅笠造りに励み、その材料となる菅笠を縫う絹糸などの生産も多く行っていた。スゲ田は今は殆んど作られていないが、少しのスゲ田でスゲ田を守る会が伝統に従い、耕作を行っていることにより昔のスゲ田の跡は今も見ることが出来る。



今井神社（小羽町三一―二四）

小羽の今井神社は後鳥羽天皇の元暦元年（一一八四）今井兼平が近江粟津で木曾義仲と共に戦死の後、兼平に従っていた小羽の人が義仲の守り神、八幡様の御神体を奉持して持ち帰り、現在の今井神社社地に神殿を建てて八幡様を祭り、別に兼平が三年間自分の越前に於ける根拠の城として現御城山（後山）に築いた跡へお宮を建て、兼平を祭りこれが今井神社の始まりとされている。

現在の場所は明治の神社合併により、八幡神社の場所に今井神社が残りました。これは渡辺武男先生によれば、大変小羽の人が賢明だったと書いている。先生の話によれば今井兼平を奉った神社は小羽と長野県松本市今井町にある、兼平大神の二ヶ所だけだそうである。又、合併の時の名前の話は以前にお年寄に聞いた話では、当時、今井垣内に区の有力者が多く今井神社の名を残すことになったのではないかとのことである。合併後も祭りの時に上げる幟は現在も八幡神社のものを上げ、両神様が仲良く奉られていること、先人達の賢明な知恵だと思ふ。

合併前の今井神社の社殿は昭和五五年現社殿建替えの際、危険なため取壊したが、神社の中の写真にて見る事が出来る。

又、今井垣内にあった鳥居も現在は新しくなったが、当時のものも柱が二本境内に残されている。

西暦六六二年、北国善四郎小羽に神明宮を祭る（今井神社） 福井県神社誌より

祭神 今井兼平

祭礼 春祭 四月二三日 秋祭 九月二三日

境内地 九九〇㎡

本殿 木造・瓦葺・流造り 間口 三間、奥行 三間半

氏子 三〇戸

宮司 広部重紀

今井兼平の余話

小羽の兼平館で三年間仕えた大町助五郎の娘は兼平の男の子を生んだ。兼平戦死の後、助五郎は母子を家へ引取り男の子がなかったので、その子を跡継ぎにし、助四郎と名付けた。この助四郎の子も助四郎と云い、家を継いでいた。その頃三河国（愛知県）から如導上人が真宗布教のため帆山（武生市）へ来られた。助四郎は上人の教えに感じ弟子となり、恵門坊覚童の名を戴いた。上人は覚童の子今井覚右エ門の尉金真を（じようがねざね）家老とされた。これが今の福井木田本山専冬寺の坊教覚寺の祖である。

その古文書は国正家に伝えられている。



今井神社神楽殿

茶臼山大権現（通称 高堂様）

小羽がら山山の山頂円墳上に薬師如来が祀られている。この山頂が茶をひいて抹茶をつくる石臼の形をしているので、「茶臼山大権現」と名付けられた。三尺に五尺ぐらいの御堂で正面に「茶臼山大権現」と書いてある額がかけられ、屋根は石瓦で葺いてある。仏像は高さ四五センチメートル位の八重の蓮弁台座は元浄明寺にあったものを寄進したと伝えられる。

祭礼 七月八日

現在のお堂の位置は小羽山の開発により平成八年に東に一五〇メートル程移された。

福昌院

小羽の村端し東の方に、明治時代まで福昌院という修験道山伏の家が建っていた。ここに祈念所があり（二間四方瓦葺）不動明王が安置され水屋も建っていた。（七尺四方葦葺）山伏の住居は三間で近在の神社の祭礼やご祈祷に招かれていた。修験道には京都醍醐寺三宝院当山派と京都聖護院本山派、吉野金峰山修験宗などがあつたが、福昌院は当山派の修験道場福井の勤性院下にあつて、大乘院と名乗っていた頃もあつた。おそらく後には竹生の大乗院の配下に属していたのかもしれない。近くには三留の気比神社の西側志津川沿いには、何軒も山伏の家が建っていた。

江戸時代は現今のように医療機関が発達していなかつたので加持祈祷、呪いが行われていたし、また祭礼は庶民の唯一の娯楽であり、家内安全・五穀豊穰の祈願が行われたため、山伏が祈祷師として重宝がられていたことを物語っている。



今井神社 旧鳥居の柱



茶臼山大権現（通称 高堂様）



今井神社 絵馬

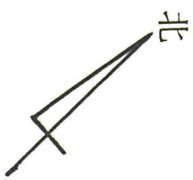
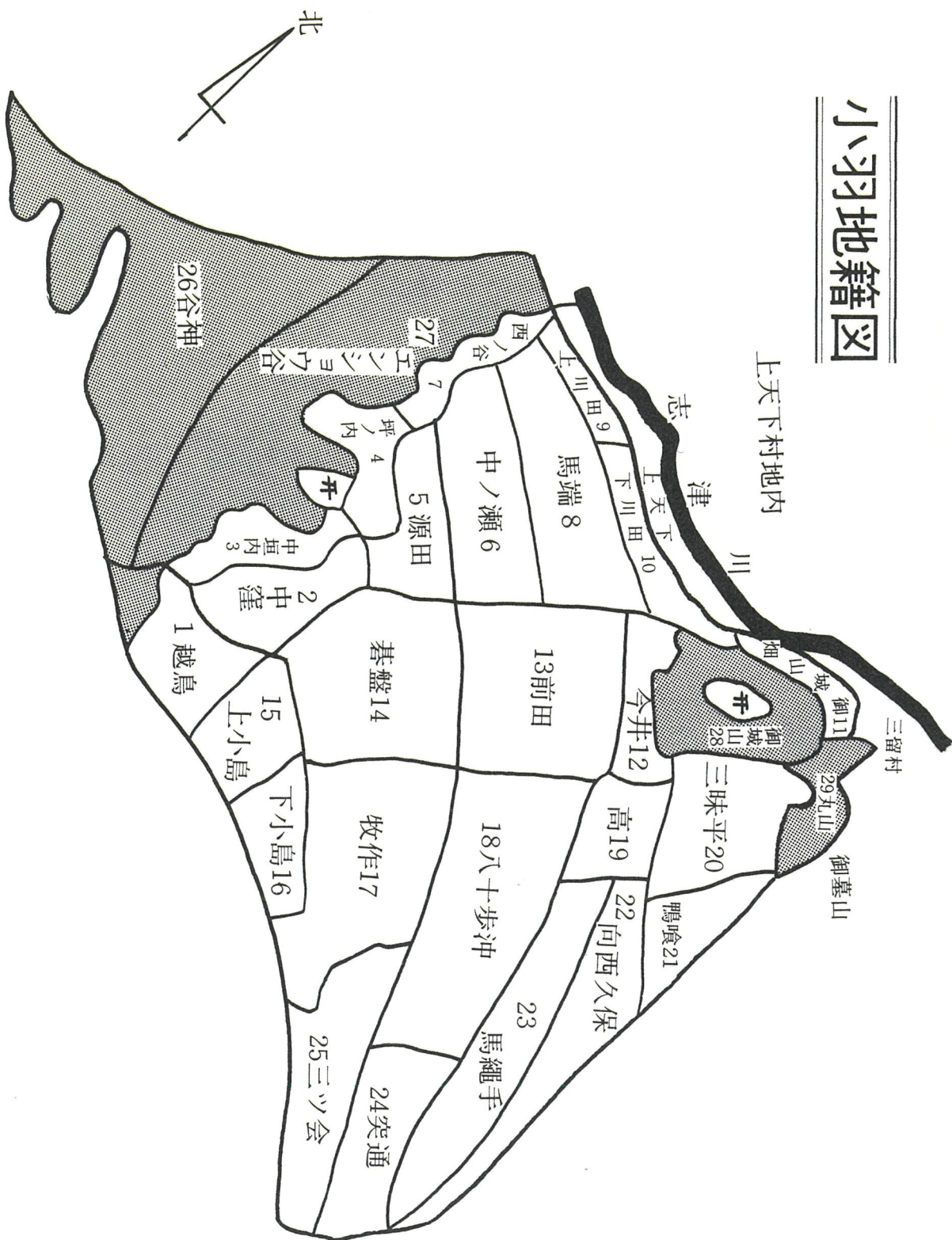


今井神社 絵馬



秋祭りのお神輿巡行

小羽地籍図



三留村のおいたち

三留という区は三方村の前身的な意味を持つと共に旧三留の郷の基ともなっているとされている。三方という言葉の発祥は、日野川・志津川・天王川の三つの川を中心とした流れが主に三留に向って集まっており、そのためにこの地を「三溜の地」といい、ここを中心として大きな潟のようになっていたので、この地方一帯を三留郷といい、その後、村制がひかれたとき改めて三つの潟の村、即ち三方村となったのであろうといわれている。古文書の中には「三溜」という字が所々にみられる。これは前述のように、日野・志津・天王の三つの川が集まった所の意味を表すものと言えよう。時代が流れ、河川の改修が行われて、湿地が乾地となり、沼地が湿地となり、何時の間にか「シ」がとれ、「三留」となったもので、三留の郷といわれた所以もここらあたりにあるのではなかろうか。

言い伝えによれば、古代大きな湖だった越前に、継体天皇が三国に水口を開かれた偉業で、大きな越前平野が出現、この時三留の郷三留区が出現し山地で生活していた人々が山から降りて、当時普及しだした水稻作りを始め、豊富な食糧を得て人口も段々増え繁栄した。大和朝廷も早くから注視されていて、大化の改新等で功績のあつた藤原鎌足に御褒美として越前の地で三留郷が与えられたのである。

孫の藤原武智麻呂公が三留五位山（神社の森を稲葉山ともいう）第七拾字七拾四番、七拾五番に、氣比神社を勧請し郷の中心となった。郷の管理者として尾崎弥右工門が派遣され、三留に居住、郷の管理をしていたが、荘園制度が崩壊し、武家の領有となった。

長祿二年（一四五八）越前領主藤原家の領有権が武家に移行され、管理体制も守護地頭制となったが、郷の管理者は変わることなく尾崎弥右工門が行っていた。室町時代には尾崎弥右工門家と朝倉が姻戚となり、朝倉孝景の孫三富景冬が七拾字六拾四番く七拾字七拾参番の氣比神社北東の小高い丘に築城した。神社の由来に記載の如く朝倉を裏切って織田信長に下った桂田長俊の攻撃を受け、三留城主景信は防戦したが、利無く落城し、この時、氣比神社の社殿、庫裏（くり）に火を放たれて焼失する。

また、十三字に大庄屋があつたといわれる。(現在も尾崎屋敷の地名が残されている。)この戦いで、集落は再起不能と思われる被害を受け、大野市から弥右工門は帰村されず、また、御神体を拝して竹生に避難した宮田神官も帰村されず、竹生に留まり現在に至っている。この様に三留地区の六〇〇〇〜五〇〇〇年以前の敗戦の大被害も記し、先人の努力で現在の三留があることを知って欲しい。

その後、豊臣時代、堀秀治の命で氣比神社が宮地に再建されたが、社領は戻らなかつた。徳川家康の二男秀康が六八万石の藩主として着任したが、若死にし、その後、治政が乱れ五拾万石に減封、その後又々幕府の大法にふれ二拾五万石に減封と、相次ぐ領土返還で幕府領(天領)になる等、領主が度々変わった。

紀州藩領について

元禄一〇年(一六九七)に江戸紀州藩邸を訪れた五代將軍綱吉から、紀州藩主光貞の四男頼方(後の將軍吉宗)に越前国丹生郡外の幕府領三万石が与えられた。このとき頼方領内巡視の折三留に牢屋敷が設けられていた記録があり、位置は元、被病院のあつたところ(五位山の北谷上)ではないかと思われるが、この牢も幕末の記録ではなくなっている。

藩政時代の所領・石高

慶長五年(一六〇〇)〜貞享三年(一六八六)	福井藩領	石高	九六一石三斗
貞享三年(一六八六)〜元禄十年(一六九七)	公料	石高	〃
元禄十年(一六九七)〜宝永三年(一七〇六)	紀州藩領	石高	〃
宝永三年(一七〇六)〜享保六年(一七二一)	公料	石高	〃
享保六年(一七二一)〜明治三年(一八七〇)	鯖江藩領	石高	〃

耕地 水田 五四町六反七畝 畑 二町二反五畝歩 山林 二二町二反五畝歩

戸数・人口 (昭和五〇年頃) 六〇戸 男 一三四人 女 一四七人 合計 二八一人



けひ
氣比神社 (三留町五七・八)

氣比神社が鎮座したのは、人皇第四四代 元正天皇の御代 養老五年 越前国一宮 氣比神宮の神霊を神鏡に分かちいただき三留七〇字七四番 の一と二(稲葉山ともいう)に勧請。同年八月 越前国領主藤原左大臣 武智麻呂公(藤原鎌足公の孫)

本社

主神 御食津大神 足仲彦神 仲哀天皇

氣長足姫尊 神巧皇后

別社 東の宮

日本武尊 譽田別命 応神天皇

別社 西の宮

神日本磐余彦尊 神武天皇 武内宿弥命 を創祀された。

以来、三留郷(三留、杉谷、田尻栃谷、朝宮、片粕、久喜津、島久喜津、竹生、清水、和田、下天下、小羽、風巻、島寺、片山)の一五ヶ村の総社として尊崇され、例祭日には神輿が郷内の村々を巡行し、大變賑やかであったと伝えられている。御鎮座より二七七年に当たる天平宝宇元年五月 惠美押勝(仲麻呂)本社を再建され、敬い申し上げておられたが、孝謙上皇病気を治す為、僧の道鏡を召されたところ病気が

治ったので気に入られ政治も任された。押勝はお株を取られたので、この道鏡を除こうと反乱を起こしたが敗れ、越前（福井）に逃げる途中、琵琶湖の北岸で妻子家来三四人無残な最期を遂げた。又、この本社が再建された時、祠官河端宮司の姓を宮田に改められた。

養老五年から長祿元年まで七三六年の間、藤原家三七世代の祈願であったが、足利時代となり武士の権力が益々強くなり荘園制度が武家の領有権に移行し、氣比神社を取り巻く情況が段々と変化していく、三留村は三留郷の司官も朝倉家と姻戚関係となつて織田城主朝倉景義の嫡男で朝倉六代朝倉孝景の孫にあたる景冬が三留城を築き、居館した。弘治元年加賀の一揆との戦いで流れ矢に当たり加賀の大聖寺で戦死した。

景冬の死後は長男景信が城主となり叔父の景総と共に三留城を守つたが、朝倉没落後、朝倉を裏切つて織田に下つた桂田長俊が攻めて来たので防戦したが、二人とも戦死。又この時氣比神社の社殿及び社家が焼き払われ、神宮三人おられたが二人は敦賀に帰られ、宮田神官一人隣の村の竹生に避難して御神体を奉祀された。

長俊をねたんでいた武生の富田長秀、片山の新光寺増井甚内は一乗谷を攻め、長俊を殺して富田長秀が変わつて越前の守護殿様になった。その長秀も信望がなく各地に一揆が起こり家臣の片山真光寺城主増井甚内の館も攻められて、甚内は竹槍で殺されてしまった。その戦いで三留城の朝倉景久も戦死した。子どもの千代雅丸は乳母に連れられて志津地区の本折の山の中に逃げ込んで小林という家にかくまってもらつた。織田信長は、この一揆を押え鎮めたので、千代雅丸は三留に帰つた。そうして、景冬をはじめ祖先の霊を弔うため坊を建立したのが正寿寺の祖先と伝えられている。その後、文祿元年七月（一五九二年）越前領主と



氣比神社拝殿

なつた堀左衛門尉秀治の命によって旧宮地に復社を許された。福井藩主松平秀康築城以来、代々崇敬されて明治一六年松平慶永公、自筆の扁額の寄進を受けている。明治八年六月指定村社に列される。

明治四四年神饌幣帛料を供進すべき神社に指定された（太平洋戦争終戦まで）

尚、現今の社殿は三留地区内の氏子全国各地の崇敬者の浄財を得て昭和三八年一月三日に造営された。

春祭 四月七日 秋祭（例祭） 九月四日 新嘗祭 十一月二三日

境内 九三三・九㎡

旧社格 指定村社

建物 本殿 木造 鋼板葺 流造

拝殿 木造 鋼板葺 流造

境内神社 薬師神社

氏子 六〇戸

宮司 宮田 京

薬師神社 由緒

七〇字五位山五六ノ一、五六ノ二（後藤七兵衛家横の山地）薬師神社が建立されていたが、昭和三八年の氣比神社の新築造営の際に東側境内に薬師神社建立が障りなく出来ることと成り、衆議一決、氣比神社境内に薬師神社が創祀された。



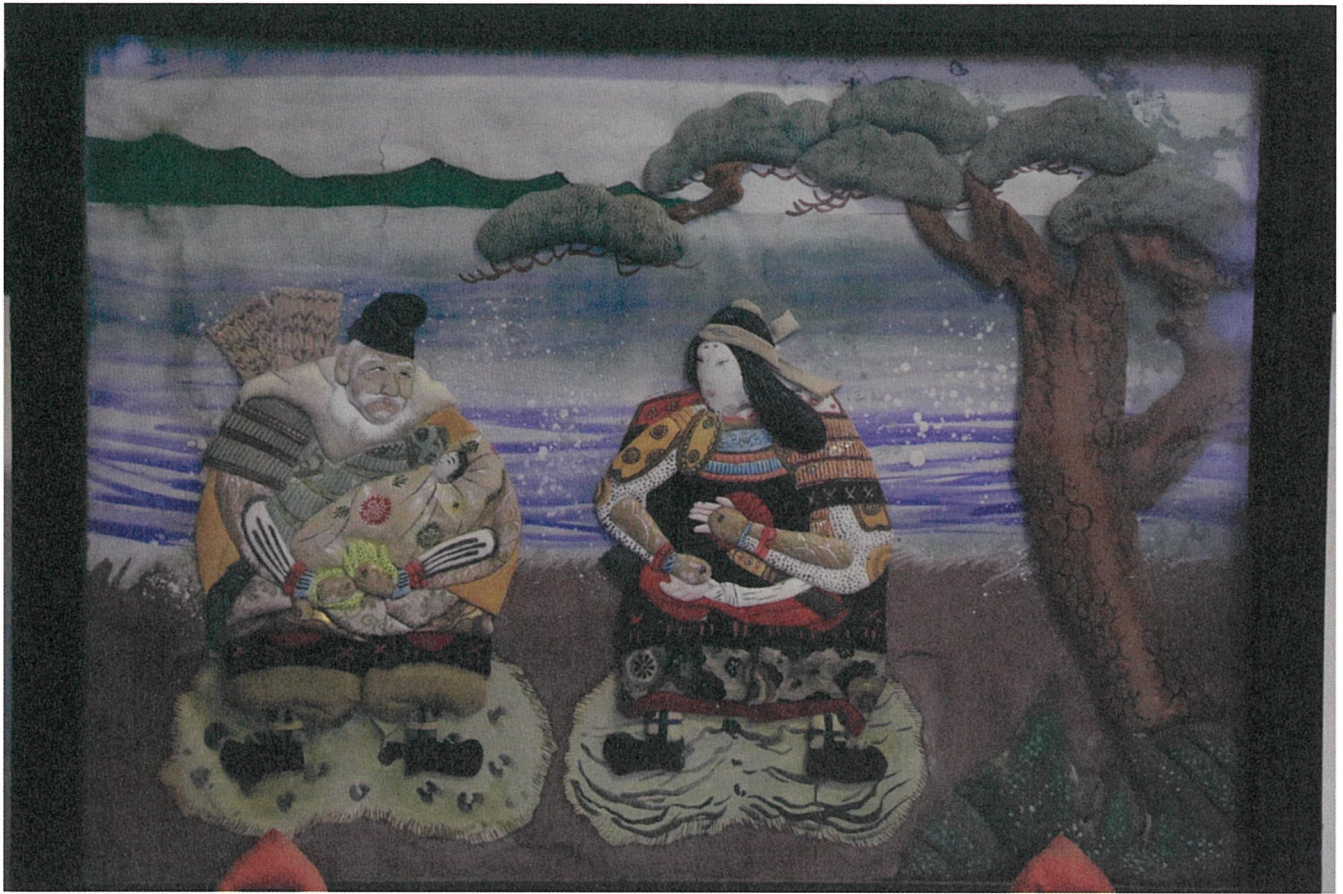
薬師神社

弥勒堂

七拾字（五位山）三五番地の山中に日本で三ヶ所しか祭られていないと言われている弥勒菩薩坐像が祀られている。弥勒菩薩はお釈迦様が御隠れになってから五六億七千万年後、佛国（御浄土）からこの世にお生まれになって衆生（我々）を救ってください、有難い菩薩で、誰が何時の時代に祀ったのか定かでない。三留村は享保六年鯖江藩に属する事になり、藩に提出した「成郷帳」の弥勒菩薩堂の記述によれば、社地は五位山の山中で十間四方の境内、「御宮堂御坐無く候」と記してあり、当初は堂が建立して無かった。太平洋戦争終戦後、昭和三〇年（一九六五年）頃、写真の如く尾崎弥三右エ門さんの長女（結婚されて梅田ミツイさん）が大阪から戻られて石堂を寄進され、現在は石堂の中で御修行されている。菩薩様の民話、金の首飾りと盗人の話は『清水の昔ばなし』を読んで欲しい。



弥勒堂



氣比神社絵馬



氣比神社絵馬

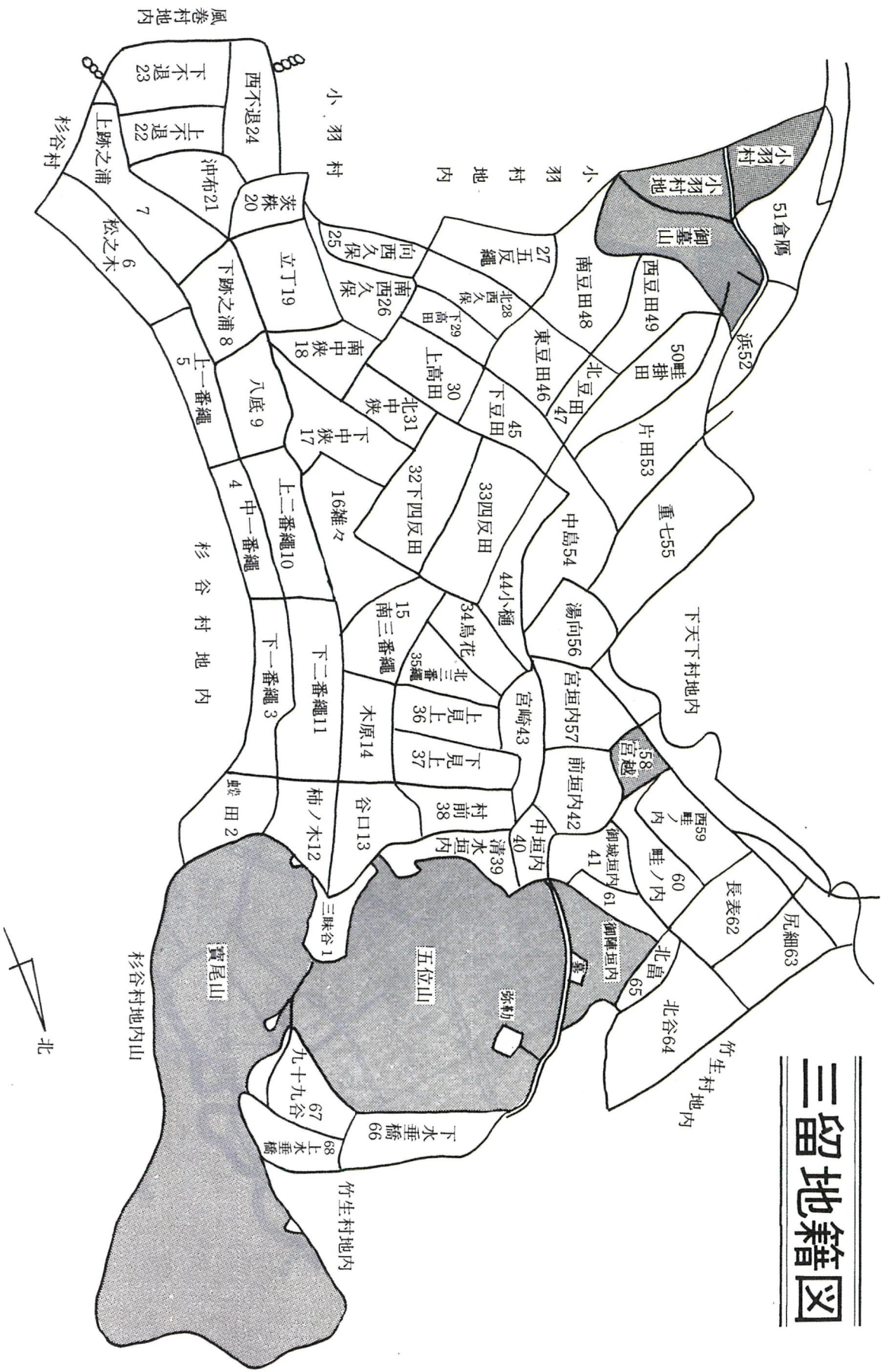


福井藩主 松平春獄公が寄進された扁額



秋祭りお神輿

三留地籍図



杉谷 村のおいたち

杉谷は、元東向い田尻の南、桂連山麓に所在したと伝えられ、今も屋敷跡や社寺跡が残っている。大昔はこの辺一帯は瑚沼のような低湿地で、近くには舟の発着場があったものと思われ、地名に「南沖」「南浦」「船積場」などの字名がのこっている。昭和一六年、四六年の全域耕地整理及び圃場整備の際、真黒い土の層から葦などの炭化しかけた土が掘り出された。この泥炭は海綿状で燃えやすく、昔は葦や雑草が生い茂っていたことを物語っている。

この桂連山（字名向山）麓の元杉谷村は後現在地に移り、氏神は桂連山頂に移し、元神社境内跡には石塔を建て観音像を安置してある。当時の戸数は一七戸と伝えられている。また桂連山麓から片山新光寺にかけての地名に「門前」「釈迦畔」「鐘搗島」「堂島」などの名が残っている。これは広善寺が「小谷山薬王寺広善院」と呼んでいた頃、この辺一帯に七堂伽藍が並んでいたその名残であると伝えられている。

藩政時代の所領石高

慶長五年（一六〇〇）	貞享三年（一六八六）	福井藩領	石高	六一八石五斗
貞享三年（一六八六）	弘化二年（一八四五）	公料（福井藩領地）	石高	六一八石五斗
弘化二年（一八四五）	明治元年（一八六八）	福井藩一時預かり	石高	六一八石五斗

耕地

水田	四七町四反歩	畑	四町三反九畝歩	山林	四〇町歩
----	--------	---	---------	----	------



白山神社 (清水杉谷町一―一〇)

由緒 御神体として薬師如来をはじめ日光菩薩・月光菩薩・十二神将が安置してあるところから、小谷山薬王寺が廃寺となった時、その仏像群を御神体として神社を造営したものと思われる。

昔は神と仏と区別しないで祀った神仏習合であったので、当町のほとんどの神社は仏像を御神体としている。

この事について広善寺の由緒書の中に「当寺由緒の儀ハ昔時天台宗にて小谷山薬王寺ト申シ数代相伝わり、本尊ハ行基菩薩之作、薬師如来十二面神ハ泰澄大師之作並ニ鎮守白山権現ニテ御座候。只今当村氏神仕り置キ申シ候。」と書かれてある。

祭神 伊邪郡美尊・天忍穗耳尊・大己貴命
いざのみみこと あまのおしほみのみこと おおなむちのみこと

祭礼 春祭 四月一九日 秋祭 九月二三日 (元一〇月二日)

社殿 間口 四間(袖右二間×一・五間、左二間×二間)

奥行 四間四尺

氏子 七十戸

宮司 宮田 京

御神体神像・仏像群

白山大権現(神像) 座像 一本彫成 三五センチメートル

薬師如来座像 七〇センチメートル

日光菩薩立像・月光菩薩立像 五〇センチメートル

銘 越福住 大仏師法橋浄雲九代 上野 俗名 川瀬源太左工門 福居 嘉永七寅 古神府 入箱

十二神将立像 一一体 各四五センチメートル

毘沙門天・不動明王立像 七〇センチメートル

神殿・拝殿同体一棟、神像・仏像 十八体全開帳、三間・三扉両開（三間・祝詞奏上・献饌）

神仏・中扉 正中・白山大権現坐像、両脇・十二神将立像（十三体）

東扉 中央・薬師如来坐像、両脇・日光、月光菩薩立像（三体）

西扉 左右・毘沙門天立像、不動明王立像（二体）

改築造営

社殿・鉄筋コンクリート建銅板葺流造

設備・避雷針専用電柱整備（神社建物の落雷遭遇にも火災・人災の

被害皆無）

防犯センサー設備（不審者侵入時に自動感知作動し、「侵入者

発生」の音声と同時に・赤色灯の回転で特定受信者の総代宅

にも同時通報システム）

桂連神社

平成三年改築

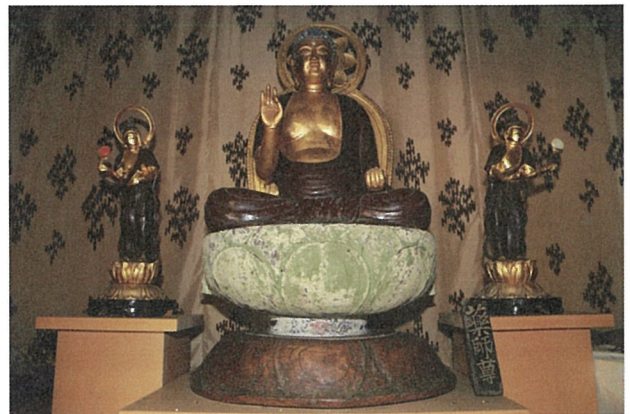
由緒 元桂連山東山麓の杉谷村氏神であったが、杉谷が現在地に移り廃村となった折、氏神を山頂に移し桂連神社として祭った。桂連山西麓の宮谷垣内には七戸が現存している。昔この桂連神社の御神体が盗まれ田んぼに捨てられ、神様が「コイヤコイヤ、タスケニコイヤ」と救いを求めたという伝説がのこっている。



白山大権現 両脇に十二神将



毘沙門天・不動明王



月光菩薩 薬師如来 日光菩薩

御神体 木造御神像。この神像には盗人に田んぼへ捨てられた時の「ヒル」の跡が残っているという。もう一体聖観音像が安置されている。

歴史と伝説

昔、向山（桂連山）の東麓に杉谷の南在所がありそこに神社もあったが、天正三年（西暦一五七五）八月織田信長は一年前から越前を支配している一向一揆（本願寺門徒）を征伐するため、一三万五千という大軍で、一二日岐阜を出発し敦賀へ向った。そこで一揆方は府中（武生）を本陣とし、今庄・木の芽・杉津・河野等の城を守って防いだ。

清水地区で真栗覚永寺端性、杉谷広善寺了誓、笹谷乗泉寺了珍が、早速元気ある同行何十人かを集め府中へ出陣した。一四日の日暮羽柴秀吉等の軍が若狭から舟で河野方面に上陸、忽ち河野の城を落し、夜明けに府中へ攻め込み一揆勢を攻め破り、町中火をつけて焼き払った。了誓法師が出陣したあと、桂連山頂で見張りをしていた者がその火を見つけた。暫くすると石田のあたりに逃げて来る者が見えた。さあ大変お寺を守らねばと大きな声で「みんなこうやこいや、助けにこいや」と同行の者を呼び集めた。南在所では、燃やされては大変と神社の御神体を田の泥の中へ隠し、全部寺のある北在所宮谷垣内へ移り、その中了誓が同行に守られ逃げて来た。そこで了誓法師を、来ていた下一光同行のものが守り、児玉氏が付き添って下一光へ隠した。

一六日早朝から羽柴秀吉、明智光秀の軍が日野川沿いに村々の寺や家を焼き払い一揆の者を捕らえ、三〇人五〇人と数珠つなぎに縛り、日野川原等で首を切った。杉谷でもお寺や在所が皆焼かれ、一揆に加わった者は皆捕らえられ数珠つなぎに引かれ片山新保の日野川原で殺され



神社御神体



神社社殿

た。老人や女子供達は桂連山上に登り、泣きながらそれを見送った。越前の國中では四万人程のお坊さんや門徒が殺されたという。

戦が終わって後、隠しておいた御神体を向山の上に祀った。盗人が御神体を盗んでいったが重くなって田に捨てた。その神様がコイヤコイヤと村人を呼んだという話にすり替えられ、九月一日に祖先の霊を慰める為にコイヤ祭りを行っている。

南在所は当時一七戸

こいや祭り（九月一日 八朔の日）

昔は子供だけが、下校後に山に登り「みんなーん・こーいや・こいや・こいや」と何十回となく連呼していた。平成八年に厚生連の健康モデル集落指定を受け、「早朝ミニ登山」を兼ね、幼児から年寄りまで六時に神前で自治会長に合わせ拝礼後、子供会長の音頭で全員一斉に「みんなーん・こーいや・こいや・こいや」と三回連呼（叫ぶ）する。

春・秋の祭礼は白山神社と同日で、秋祭りの前夜は山頂の境内で夜遅くまで火を焚き、太鼓を打ち鳴らし近郷にも届いていたが、昭和四〇年代に青年会（団）解散以降途絶えた。

昔からの山道は狭く急勾配の箇所は階段で今も歩けるが、平成一〇年に林業作業路が神社付近まで開設され後に路面舗装、「通行制限」はしているが山頂まで自動車通行も可能になっている。

遺跡・地名・その他

四五字向山二七番、山林式畝一九歩のところには社殿跡があり、見寺和兵衛外七〇名の共有地となっている。ここに桂連神社が建てられたのではないかと思われ、石塔の中に観音石仏が安置されており「元文四末年（一七四〇）九月吉日建之」と書かれている。昔はこの付近に大杉が生い茂っていたので、「杉谷」の字名がおこったとの言い伝えがある。

左義長

農作物の豊作を願う行事として二月一五日早朝に田圃近辺で実施していたが、昭和六年の飢饉・恐慌以来途絶えていたものを、平成二年に場所を白山神社境内に移し、六〇年ぶりに見事復活した。

左義長飾りの頂点には品質日本一を誇る特産品の菅笠を据え、鶴と亀を前方に飾り付けた特色のある大きなもので、初総会の朝（一月第二日曜日）九時に拝殿で四本の松明に採火し自治会長、神社総代など四人が揃い四方から一斉に点火し燃納する。

当日は、早朝から大勢の老若男女で賑わい五穀豊穡、家内安全、健康長寿、学業成就など書の短冊と同様に燃え盛る炎を見守り祈願し、お神酒とするため、甘酒の接待を受け、新年の平穏・無事を祈る充実した近郷でも誇れる正月行事になっている。



左義長飾りの頂点に特産の菅笠



秋祭りお神輿巡行

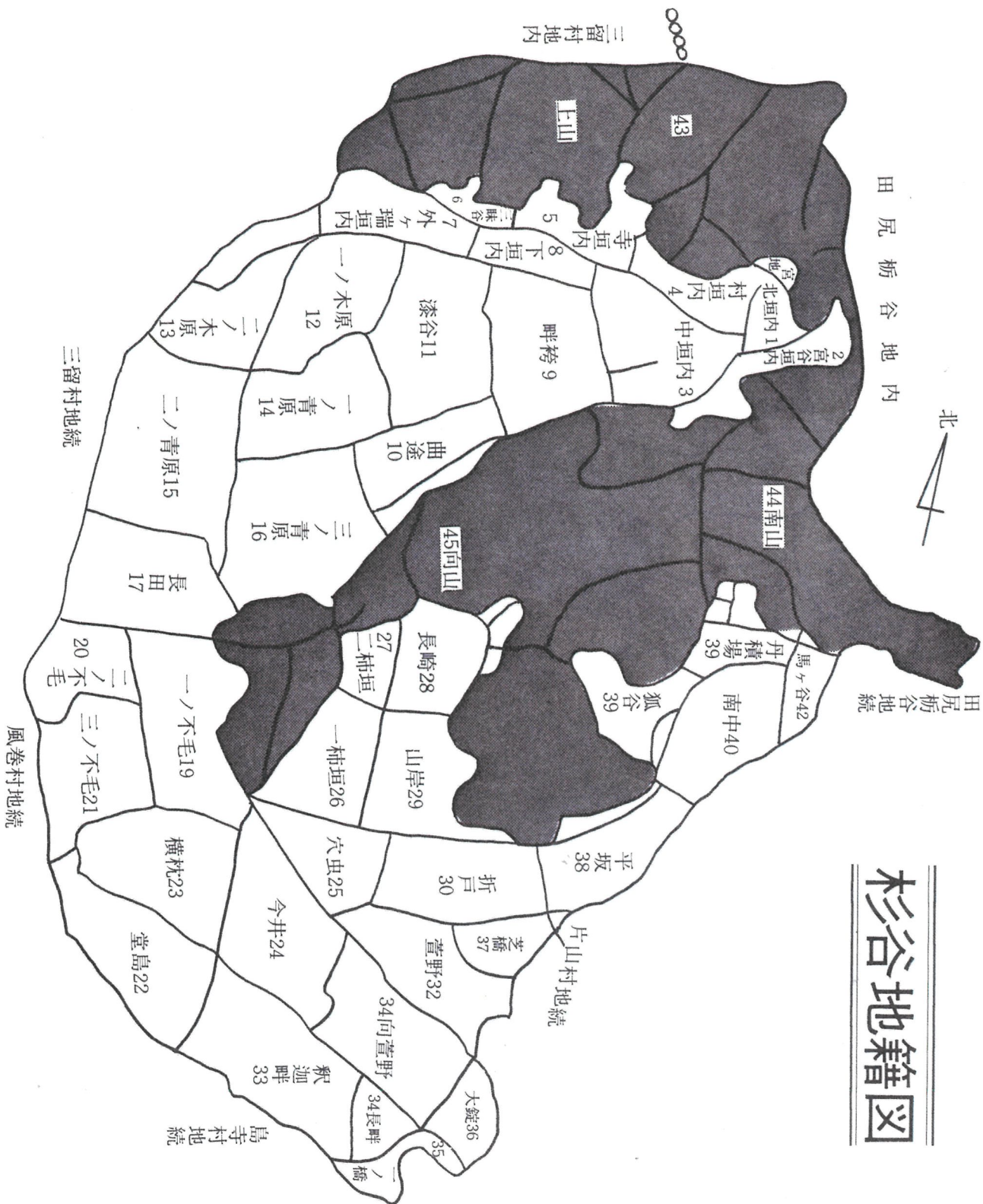


白山神社の絵馬



白山神社の絵馬

杉谷地籍図



田尻栃谷村のおいたち

日野川と志津川との間に広がる三方丘陵中央部南麓に位置し、田尻・栃谷・古屋の三つの地区からなる。

奈良時代、東大寺の荘園「椿原の庄」の田地が片山（新光寺）の前に広がっていた。地名は、この「椿原の庄」が朝宮の谷間へ続いている田畑の端が田尻であり、栃谷は栃の木が茂っていたところからその名が生まれた。栃の実は、古代人の食べ物として貴重な食料源の一つで、大昔はこの辺りにも茂っていたが、現今では、ほとんど絶えて、奥越の山間部にだけ残っている。栃という名のつく地名は、このように古代の集落が近くにあったことを物語っている。なお、田尻栃谷の「栃」の字は、平成一八年の福井市編入まで「柝」の字が用いられていた。

近くの片粕山の中腹には、縄文中期頃（紀元前二〜三千年）古代人が住んでいた縄文遺跡があり、すぐ近くの田尻栃谷の小高い丘陵の上（ホープタウン田尻付近）などは古代集落がつくられていたのではないかと思われる。

栃谷の北、朝宮との境に古屋垣内があり、古くはここで西方の田尻、杉谷に向かう道と南方の栃谷・片山へ向かう道とに分かれていたという。江戸時代前期の地理書『越前地理指南』では、当地区を田尻村・栃谷村・田尻栃谷村と三様に記している。江戸時代後期の地理書『越前国名蹟考』には田尻村とあつて、栃谷村を枝村として扱っている。「栃谷村が二村に分かれていた」との記述があり、古屋垣内を指すと思われる。

昭和四八年（一九七三）片粕を中心に大型住宅団地清水グリーンハイツの建設が始まり、隣接する当地区の田・畑・山林が福井県住宅供給公社によって買収された。その結果、住宅建設が進み、田尻栃谷地籍の一部が、グリーンハイツ一〇丁目となった。

当地区には、田尻と栃谷の二カ所に、春日神社が現存し、字名に「宮谷」「宮垣内」といった神社に関わる字名も残されている。



春日神社（栃谷）（田尻栃谷町二二―一〇）

由緒 第五代文徳天皇の天安二年（八五八）戊寅年に勧請される。永年中

（一五五八〜）数度の兵火に罹り社殿が焼失する。

社殿内に残されている「春日大明神縁起」（年代不詳）によれば、元龜

元年（一五七〇）八月、一向一揆が当時禅宗であった近在の随応寺を焼き払ったが、本尊の阿弥陀如来像は、本神社に難を避け焼失を免れた。

寛文四年（一六六四）盗賊に盗まれたので、当時盗賊が落としていった左足とともに石造りの阿弥陀如来を安置した。その後発見され、貞享二年（一六八五）本神社に遷座され、石造り阿弥陀如来は随応寺へ移されたと伝えられている。

明治一二年一月村社に加列され、この頃の社殿は、前口奥行ともに三・六メートル（二間）、境内二二七・七平方メートル（六九坪）、氏子三七戸であった。

現存する本殿の造営は、昭和二九年一月に再建された。昭和二八年九月の一三号台風により被害を受け、境内の杉を伐採して得られた売買代金八万円を基に浄財を集めて建立されたもので、総経費は四一万円余であったと記録されている。

祭神 天児屋根命

御神体 本地仏阿弥陀如来立像 像高一〇六センチメートル 透し彫り舟形光背

祭礼 春 四月一日 秋 一〇月八日

境内 五〇八平方メートル（一五四坪）

旧社格 村社

社殿 本殿 一間四面 木造瓦葺流造 昭和二九年十一月造営再建

拝殿 二間四面 木造瓦葺流造 明治二二年造営後、本殿改築の際拝殿に改造

氏子 二〇戸

宮司 宮田 京

その他 社殿内には、鹿、山姥、弁慶、船などを題材とした絵馬が奉納されており、先人の

神社に対する様々な願いが伺える。海岸の神社には、航海の安全を祈願して、船図が多く奉納されるが、里の神社には珍しいと聞く。かつて隣の朝宮には日野川沿いに船付場があり、三国港、福井城下との往来があつたためと思われる。

境内に古屋の追分（街道の分かれ道）に建っていた道しるべが移設されている。この「道しるべ」は、追分の越知山道と府中道の分かれ道の辻に建っていたもので、「右おち山・左府中」と記されている。この道は、中世から江戸時代・明治時代にかけて福井御城下へ通じる重要な街道の一つであつた。境内の広場は、太平洋戦争後、区民の憩いの場として相撲・民謡・演芸大会、野外映画や朝のラジオ体操などの場として利用されてきたが、社会の変化（娯楽の多様化、人口減少や少子高齢化など）と共に利用されなくなってきた。

現在、秋の祭礼時には子供みこしが奉納され地区内を巡回する。



春日神社（栃谷）に立つ「道しるべ」



「船の絵馬」 春日神社（栃谷）



春日神社 (田尻) (田尻栃谷町三〇―三〇)

由緒 第七五代崇徳天皇の天治元年(一一二四)甲辰年九月に勧請さ

れる。長祿二年(一四五八)戊寅年四月斯波家の家臣某が社殿を

造営した。明治初期の社殿は、間口奥行共に二・七メートル(一

間半)、境内二九七平方メートル(九〇坪)、氏子一四戸であった。

祭神

天児屋根命

あめのこやねのみこと

武甕槌命

たけみかづちのみこと

経津主命

ふつぬしのみこと

御神体

本地仏 阿弥陀如来(三九・四センチメートル)

観世音菩薩 勢至菩薩(二二・七センチメートル)

祭礼

春祭 四月一日 秋祭 一〇月八日

境内

二二七・七平方メートル(六九坪)

旧社格

村社

社殿

本殿 一間半四面 木造瓦葺流造 建立 明治元年

拝殿 二間四面 木造瓦葺流造

氏子

七戸

宮司

宮田 京

鳥居

明治二〇年建立

その他 社殿内には、絵馬が奉納されており先人の神社に対する思い入れが偲ばれる。

境内の広場は、太平洋戦争前、区民の憩いの場として子供相撲大会などが行われたが、戦後は栃谷の春日神社でまとまって執り行われた。



春日神社(田尻)絵馬



春日神社(田尻)絵馬



春日神社 (栃谷) 絵馬

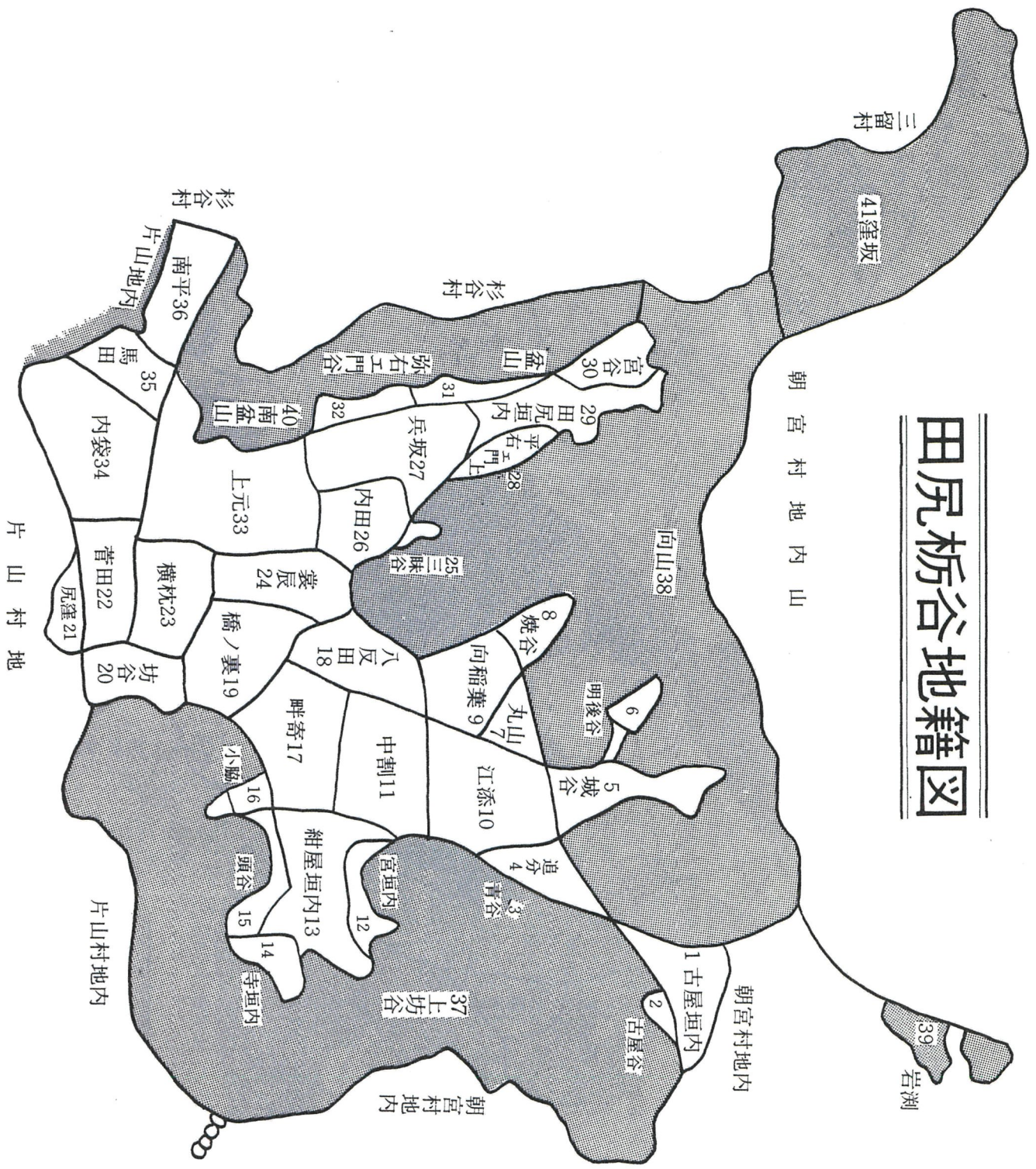


春日神社 (栃谷) 絵馬



平成 27 年秋祭りお神輿

田尻栢谷地籍図



竹生 村のおいたち

竹生の丹生神社脇に川上神社が建てられている。祭神は水の神「ミズハノメの神」という女神である。水は農耕の「命」であり、旱天の時大自然の神にすがって雨を降らせてもらうため、雨をつかさどる神に祈りを捧げるといふことは、ごく自然の事と思われる。このような川上神社を祀ることは、古代から開けた処に多く、また、朱の神「ニウズヒメの神」を祀る丹生神社も古代に朱を採集する種族と関係があり、竹生付近で朱が産出していたのではないかと推測される。朱は古代人の貴重な宝物で、朱は赤色の血液の色であり生命の源である。生命の危険にさらされた時の救いの色であり、死者の全身に生命の源である血液に代る朱をぬること「施朱」が行われていた。

今一つ靈魂不滅思想から朱をぬってかため、永久に滅びないようにしたとも言われている。近くの片粕縄文遺跡から「丹塗りの盤」（大きな平皿）が出土し、風巻の塚ノ越古墳の遺骸を埋葬した付近から「朱」が出土したことなど、近くに朱の産地があったものと思われる。

このように竹生地区は早くから開けた所で、丹生神社の由緒書（明治初年）には、人皇四二代文武天皇時代大宝三年（七〇三）祭神少名彦尊を勧請したと書かれてあり、一二七〇有余年前に鎮座したことになっている。古代の住民は高台や山の中腹の高い処に住居を構えていたので、竹生では村端し白山神社の上の丘陵や北側の谷間・南の山の中腹に住んでいた。今でも北側の山裾から「土師器」が出土している。（現在水田の中から土器が出土しているのは、山裾の土を客土したためと思われる）近くの三留地籍（弥勒堂下）の中腹からも土器が大量に出土していることなど考えあわせると、竹生地区には古くから人が住んでいたことが伺える。竹生の地名については、若狭国丹生の浦から神様が「鮎」にのって当地へお下りになったので「タコウ」と呼ぶようになったといひ、それ以来、鮎を食べない習慣が残っているという伝説がある。また、竹が生い茂っていたので竹生の地名が生まれたとも言われているが、タケフと呼ぶべきところを「タコウ」と呼ぶようになったのは永い年月「タコフ」の発音が言いにくいので「タコウ」に訛ったものと思われる。



丹生神社 (竹生町一八一)

由緒(明治初年教務所提出より)

人皇四十二代文武天皇御宇、大宝三年三月八日勸請以来、社家社僧等モ数多ク之アリ、其後八百有余年ヲ経テ、天正二年九月、織田兵乱ニ際シ社殿及ビ社領共ニ破壊没収セラレ、同四年二月朝倉義景ノ家臣鎗嚙山城主村野源五郎景政嫡子玄吾景宗帰依アリテ、本社拝殿共再造営アリ。

其後、百十一年ヲ経テ貞享二年三月越前国大守綱昌卿以来、領主祈願怠ル事ナシ。明治九年六月十一日、村社ニ列セラル。大正元年八月二十六日、福井県ヨリ神饌幣帛ヲ供進スル事ヲ得ベキ神社ニ指定セラル。

社名 昔は薬師宮といい、別社として観音堂があり、別当寺院として大乘院があった。別当院とは神社や寺院の寺務統轄をする所で、神仏習合の神社の場合、神宮寺と呼ばれる別当寺院が併置される場合が多い。近くでは織田剣神社には織田寺、天王の八坂神社には法泉寺という別当寺があった。明治新政府は神道の国教化政策としてこれらの神仏習合の慣習を改革することになり、慶応四年(一八六八)三月に大政官達で神社名、御神体から仏教色を除くよう通達した。竹生の産土神社(氏神)は薬師宮といって「薬師如来」の名を神社名にしていたので「少名彦神社」と改められ、明治九年村社

に列せられ川上神社を脇社として合祀し、大正元年丹生神社と改めた。

祭神 脇侍 持国天（一・二メートル）

少名彦命 本地仏 薬師如来（等身座像六五cm）伝臥行者作

醍醐三宝院下

脇侍 毘沙門（一・二メートル）

社殿 本殿 二間四面 拝殿 間口四間半 奥行三間

祭礼 元旦祭 一月一日 春祭 四月八日 秋祭 九月一二日

新嘗祭 一二月一二日

大祓式

氏子 五四戸

宮司 宮田京

川上神社

本社の西側に五尺四面の小社が建っていて、水の神「ミズハノメの神」を御祭神として祀っている。この川上神社は、この地方に早くから祀られた神の源ではないかといわれている。丹生神社の社名は水の神「神八大龍神」と深い関係をもっていて、御神体は神仏習合の造形をとどめている。

境外社（不動堂）

本社東の杉林の中に高橋新左工門家の不動堂があり、石造不動明王が安置してある。この不動明王は、高野山参りを記念して造立したと伝えられる。

社地 不詳



丹生神社神殿



不動堂



川上神社

観音堂

祭神 聖観世音菩薩立像（七〇センチメートル）

不動明立像（三五センチメートル）梨の木一木彫成

毘沙門天立像（三五センチメートル）梨の木一木彫成

社殿 間口一〇尺 奥行九尺

鳥居 元禄十五年正月吉祥日（一七〇二）・南無観世音菩薩と紀元銘がある。

氏子 吉田長助・山田伝兵衛・前岡丈右工門・林馨・吉田西右工門・林庄右工門・吉田長

三郎・山田伝右工門・吉田北右工門・吉田奥左工門・吉田長兵衛・吉田武右工門・

吉田清治郎・吉田徳左工門・林常吉・山田伝左工門・前岡長左工門・吉田彦右工門

棟札 弘化四年八月七日（一八四七）、吉田北右工門、鍵取 目黒伝右工門、大工 下野村

惣八、竹生山 奉再建遷宮本地氏子安全所

権大僧都大乘院覚了法印

白山堂

祭神 白山権現 熊野権現

神像（中央）聖観音菩薩立像（左四〇センチメートル）毘沙門天立像（右七〇センチ

メートル）

由来 阿弥陀如来立像は、畠中専修寺が寛文三年（一六六三）に破却された折、竹生の門徒が

台所に安置されていた阿弥陀さんを拝領して、白山堂に安置した仏像であると伝えられて



白山堂



観音堂

聖観音像は、慶応元年（一八六五）に片山に安置してあったものを、同年七月竹生の大乗院
覚了坊が世話をしてこの白山堂に納めたと言われている。

社殿 安政六年五月（一八五九）に再建した一間半四面の堂で、古墳の端を削って建てられ
ている。昭和五十一年に屋根などの補修が行われた。

祈願札 明治元・七 奉修大峯柴塔護摩供息収

棟札 奉再建遷宮白山・熊野御本地 安政六年仲夏

氏子 宮崎家・西浦家・高岡家・宮腰家

猿ヶ堂と庚申塔

猿ヶ堂がある一帯を竹生古墳群と呼んでいる。猿ヶ堂には庚申塔が祀られている。

昭和五十二年七月に改築された。

庚申塔の祠の近くには八大竜王が祀られてある。

庚申塔の主尊青面金剛明王が猿田彦と結びつき（仏像と道教が混同され）、地名として猿田
彦が祀つてある「猿ヶ堂」という呼び方が残ったと思われる。この庚申塔は大乗院（薬師宮
別当寺院）が建立したもので、下天下、猿和田にも元禄時代に建立された庚申塔がある。



庚申塔



八大竜王



丹生神社の絵馬



丹生神社の絵馬



大祓式 七月二十九日

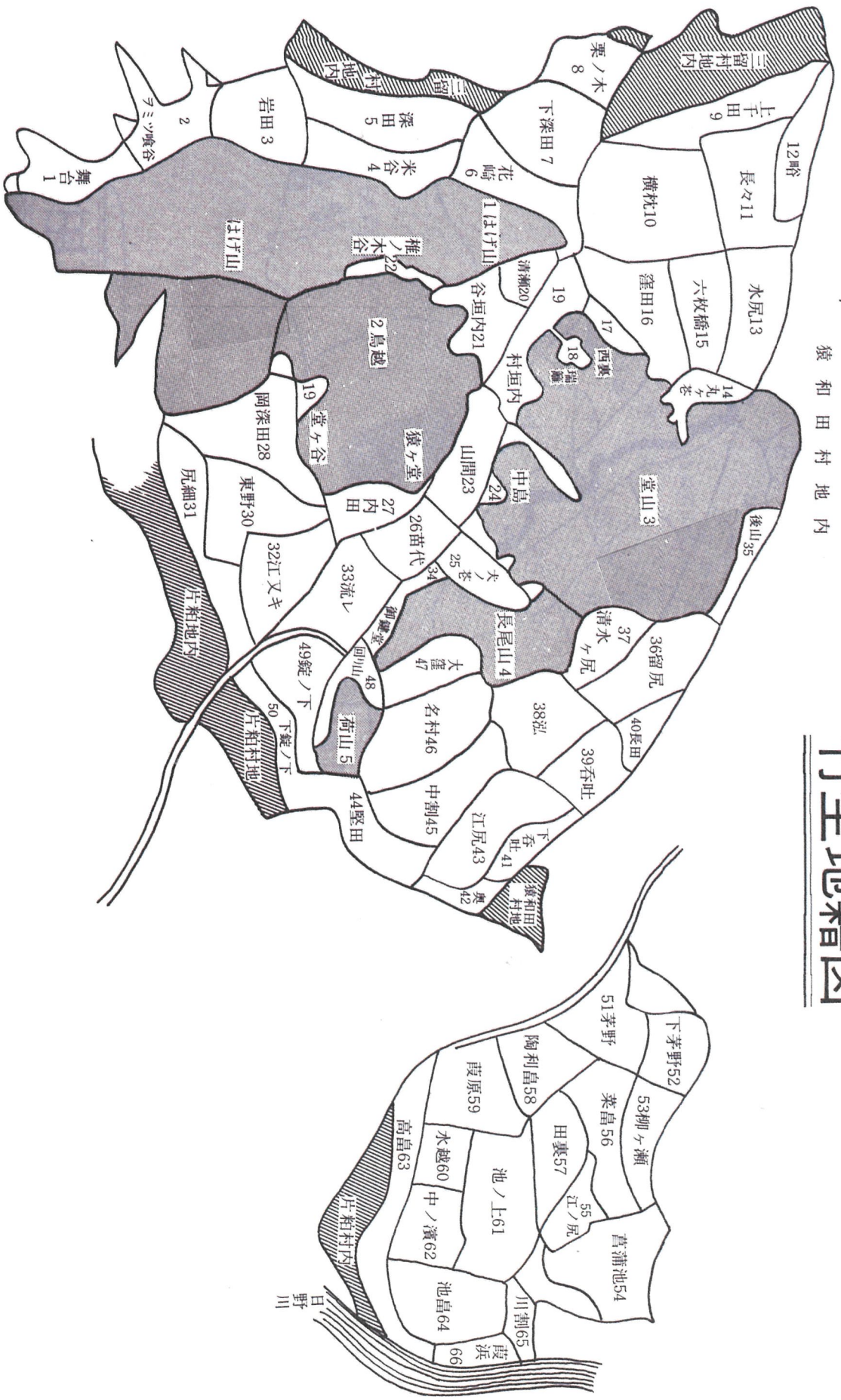
宮田神職の奉務神社二九社ゆかりの区長・総代等が参列し、丹生神社境内において例年行われている。式は大祓い・道饗祭・鎮火祭を合わせて行うもので、境内の中に設けられた祭場の四方を丸太で囲み、八か所に斎竹八本立て紙垂を付した注連縄や白幕を張り、その前に御幣を立てた台をすえて神籬（ヒモロギ・神の依代）をとし、台の上には三方にのせた御饌（御膳米）、神酒を供える。祭場の中央に斎火を焚き、その前で降神・昇神の儀式を行う。献饌の後、大祓詞・道饗詞・鎮火詞を神職が斎火の前で奏上し、祓いや奉幣の儀式などを行う。

「大祓」（おおはらえ）は罪穢を祓い清める神事で、個人のみならず社会全体を祓い清めていこうとする理想と願いが込められている。

「道饗祭」（みちあえのまつり）は八衢比古、八衢比売、久那戸の三神を祀り、災いをもたらす鬼魅や妖物が入らぬよう守護を祈願する祭り、「鎮火祭」（ほしずめのまつり）は、火災を防がんがために行われる祭りである。

竹生地籍図

猿和田村地内



清水 村のおいたち

清水区は志津川が日野川に合流する要所にあたり、標高一一五・八メートルの城山を背にして南側山裾に散在する村である。城山は独立丘で余り大きな山ではないが、別名「水山」と呼ばれ所々に「清水」が湧き出ている。志津川の川尻にあたるので「清水尻」と呼ばれるようになった。

古代人が早くから住みついた所は、先ず水の出る湧水線上の山の中腹で、近くに大きな川などがあって魚介類等古代人の食物の豊富な所であった。清水区付近には大きな日野川が流れていて、湧水も豊富で狩猟生活の条件がそろっていたので、縄文時代頃に人が住みついた所である。近くの北堀貝塚からこれらの古代人の使った石器・土器をはじめとして、貝殻・獣骨などが出土している。

城山の東安田峠から日野川の岸まで続いている丘陵は、標高三〇〇〜六〇メートルの低い山で、この山の頂上に前方後円（方）墳・円墳一二基が尾根いっぱい構築されてある。これらの古墳は四世紀前半頃の古墳で、中でも前方後円墳や前方後方墳が同じ山頂に四基も築かれているのは珍しく、いずれもこの付近に住んでいた豪族の首長の墳墓である。

奈良時代には、奈良東大寺の荘園「道守庄」が、清水の飛地「大野」の近くまで墾田となっていた。時代が降って室町時代、朝倉氏の家臣村野源五郎景光の嫡子玄吾景直の子孫が代々城山の上に城を築き「鱧噛城」と呼び居城として住んでいた。清水は、志津川の川尻で日野川に合流している交通の要所で舟付場として栄え、志津川を上下する小舟で物資や年貢米が運ばれ、ここで日野川の千石船に積み替えられ、三国港や福井城下へ運ばれた。また、陸路として浦生浦・志津・糸生・織田・四ヶ浦方面から福井城下へ通ずる交通の要路で、清水尻の渡しが、重要な役割を果たしていた。大字名の呼称は、昭和三〇年町村合併により清水町が誕生した折「清水尻」を「清水」と変えた。



八幡神社 (清水町九一)

祭神は譽田別尊で応神天皇を祀る。このほか左右に天皇の母神功皇后、父仲哀天皇を祀る例が多い。母、神功皇后が懷妊中、朝鮮に出兵し、新羅を討ち百済・高句麗を帰服させ筑紫に上陸され、応神天皇をお生みになられた。このため胎中天皇とも呼ばれ、武勇にすぐれ、諸国の海人部・山部を定め在位四一年、この間兵備が整い国が富み皇族が宣揚したと言われている。

清水には、上・中・下と三つの神社があり、日野川沿いの下の堂様は大水の折に川下の東下野に流されて拾いあげられたと伝えられ、東下野の足羽神社に合祀された。その後「清水へ返してくれないか」という、神のおつげがあつたが帰さないで、金鎖でつないで大切に祀っている。

上の堂様、秋葉神社は、かつて西谷垣内の田島重左エ門家の後ろにあり、今も跡が残っている。祭神は、静岡県西部赤石山脈南端の標高八六六メートルの秋葉山頂にある「秋葉神社祭神」火之迦具大神（ヒノカグツノオオミカミ）である。この神様は、火の神で毎年一月一五日、一六日の両日には火祭りがおこなわれ火災防護を祈願する。

かつて三尺坊という僧が秋葉山に登り、頭には火の神の威徳をいただき、仏の法衣を着て真言秘密の修法を行ない、天狗となつたといわれ、火の権化として秋葉山に祀られるようになった。そしてこの防災の神様は全国に信仰が伝わった。県内にも福井市城

ノ橋の秋葉神社をはじめ、近くには大谷寺にも秋葉神社が祀られている。

通称「上の堂様」と呼ばれていた秋葉神社は、明治時代末の神社廃合令により八幡神社に合祀されたのであろう。なお、神社廃合令によつて八幡神社も氏子数や基本財産などがなかったため、書類上は竹生の少名彦神社（後丹生神社に改む）に統合されたことになっていた。

福井県神社誌には次のように書いてある。

（註） 景光は、「景政」、景直は「景宗」の誤りではないかと考えられる。

祭礼 春祭 四月一五日

水口祭 五月五日

秋祭 九月二四日

境内 一〇七四平方メートル

建物 本殿 木造 鋼板葺 流造

拝殿 木造 瓦葺 入母屋造

氏子 二九戸

宮司 宮田京

創立の年月不詳。明治初期の社殿は間口二間半、奥行二間、境内三八〇五坪、氏子三〇〇人であった。

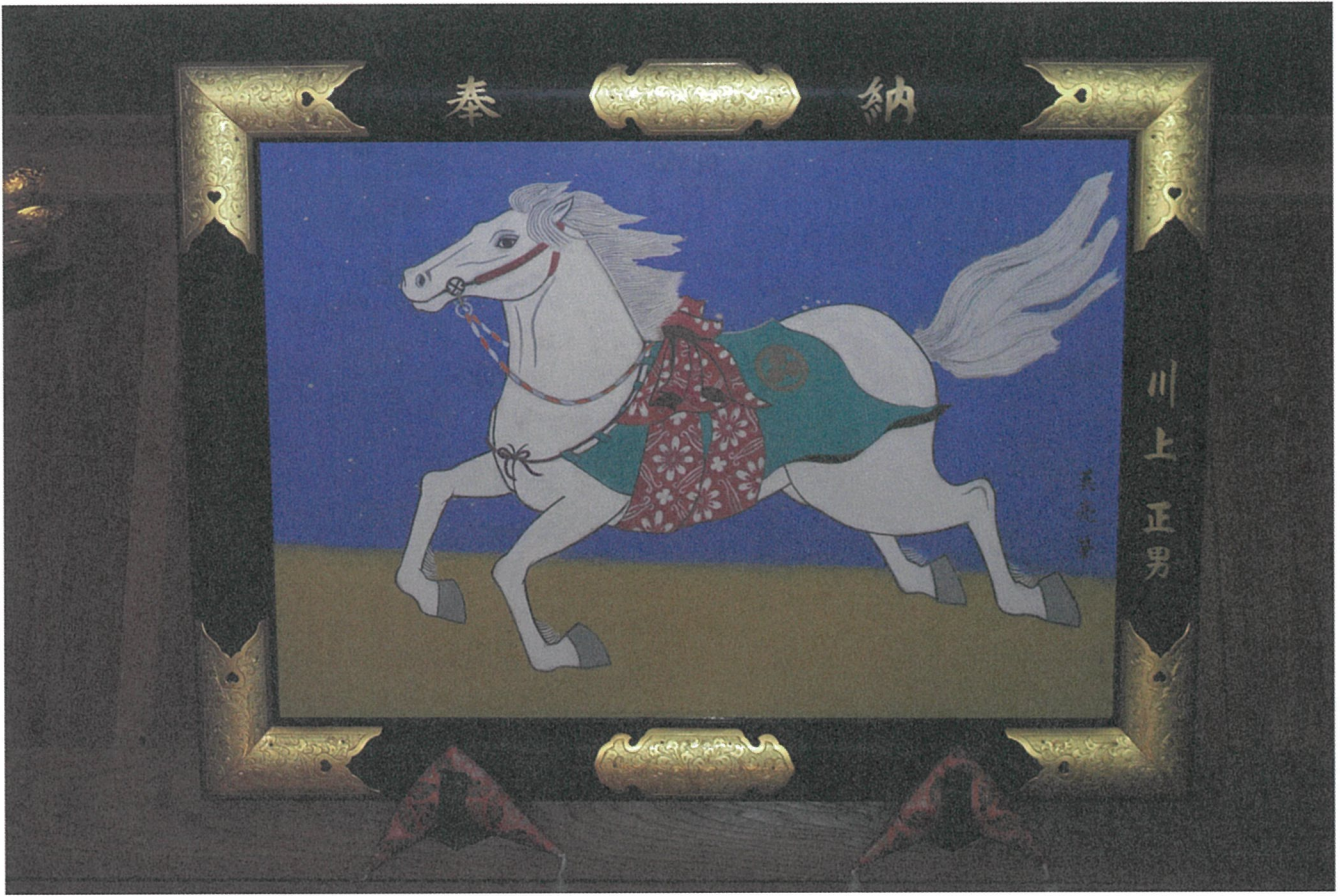
昭和四三年拝殿を改築造営し、石玉垣・獅子狛犬・灯籠を建立し境内を整備した。



神殿



拝殿



八幡神社絵馬

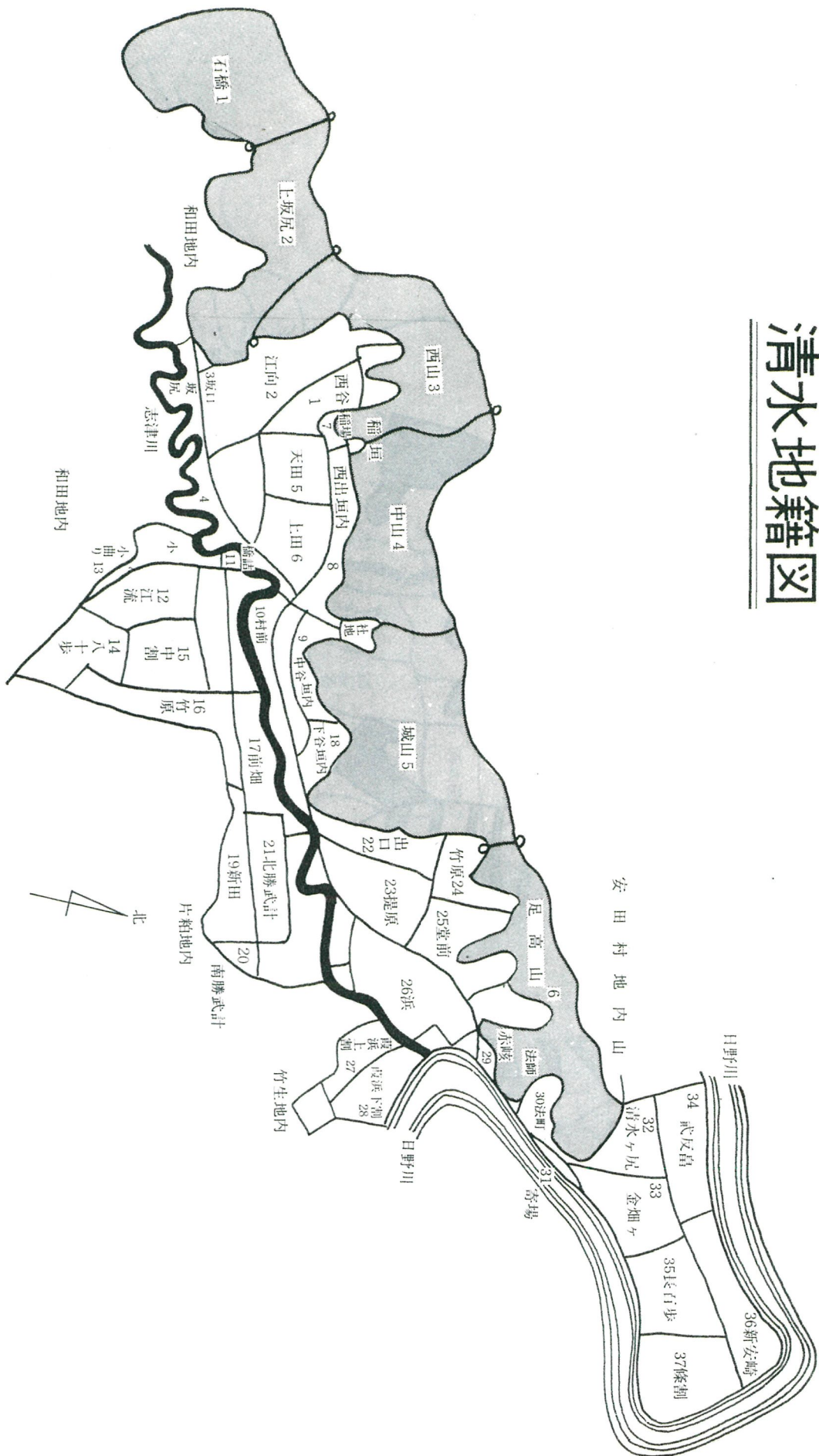


八幡神社絵馬



秋祭りお神輿

清水地籍図



和田 村のおいたち

大昔、和田一帯は沼地で山裾を志津川が屈曲して流れていた。この辺は沼地で大木が茂っていたので、水田の下二メートルくらいの所に周り四、五尺の大木が折れ重なって泥炭化しかかっているとのことである。

そのため和田区で最初に住みついた処は、西の方本堂地籍の堂ヶ谷や和田の小谷山の中腹などの高い処であったものと思われる。宝暦十一年（一七六一）の村明細書出し帳によると、本堂の田地三一五石余りを小作（出作）している。この事は和田の者が大昔に本堂地籍に住んでいて耕作した名残ではないかと思われる。なお、細坂で四〇石、羽坂で五〇石、末で五〇石、更毛で五五石を小作していて本堂と合せて五〇〇石余りも出作している。この外、和田の持山が末更毛川の周囲にあることも大昔の和田が現在地より西方に住んでいたことを物語っている。

和田の石高は江戸時代はじめから六九四石余りであるが、宝暦十一年頃には九一軒もあり、五一〇石も出作していて余り裕福とは言えなかった。村前の水田は水害に悩まされ、ほとんど水腐れで飯米にも事欠く時があった。そのため天保年間（西暦一八三〇～一八四四）本保陣屋代官大井帯刀にお願いして、上田と下田疲地とに分けて、年貢を負けてもらう事になった。

和田の区名は本来「猿和田」と呼んでいたが、昭和三〇年町村合併の時「猿」の字を取って「和田」と呼ぶことにした。猿和田という地名はアイヌ語の「葦が生えている所」という語源であるとも言い、また、村端下天下の方に猿がたくさん住んでいた「字さるや」という処があり、ここから猿和田の区名が生まれたとも伝えられている。



春日神社 (和町五―二五)

祭神

天児屋根命 倉稻魂命 武甕槌命 大宮比賣命
あめのこやねのみこと うがのみたまのみこと たけみかづちのみこと おおみやひめのみこと

經津主命 大田之命 比賣大神
ふつぬしのみこと おおたのみこと ひめのおかみ

社殿

本殿 二間四面

拜殿 二間半四面 (大正四年改築指定村社に列せられる)

拜殿は、昭和五三年改築、棟梁は上田敏

境内 二反九畝一七歩 堂田 一反半

祭礼 春祭、四月一七日 秋祭、九月一七日 山祭、一二月九日

氏子 四一戸

宮司 宮田 京

合祀 秘仏元三大師、地藏菩薩、十一面観音、阿弥陀如来などが合祀
 されていて、五社大神と称する。

改築前は、拜殿の西の方に春日神社があり、御祭神三座と元三大師、その外の仏像が安置され、東の方に草葺の拜殿があり三間半程の広い場所で若連中の集会場に使われていた。この拜殿に地藏菩薩が祀られてあった。

現在の本殿正面中央に男神像・女神像(有鬚)地藏菩薩、十一面観音、秘仏元三大師、また左側には、中央左の女神像の横に神像、阿弥陀如来(仏師養老文逸の銘あり)、地藏菩薩立像(二尺二寸)全部で神像四座、仏像四体および秘仏が安置されている。

これらの神像・仏像は高さ三〇センチメートル前後の像で、木像一本彫成の地方作の尊像で彩色が施され、素朴な庶民の願い事を叶えられるにふさわしい像である。秘仏元三大師の箱には「天下和順日月清明・五穀成就万民快樂」と書いてある。祈願のため奉納されたものか、または別に祀ってあったものを合祀したのか詳かでない。元三大師は平安時代中期の天台宗の名僧・慈恵大師のことで、天台座主・大僧正位となり、天台宗中興の祖である。鯖江の長泉寺にも有名な元三大師が祀られてあることで良く知られている。

和田では、中世から近世江戸時代にかけて民間信仰が盛んで神仏を大切にし、礼拝することが行われ、この外に庚申さん、地藏さん、金比羅さん、薬師さんなどが祭られていることは他区には見られないことである。

正月の行事

元旦の初詣には、お蠟燭を持参し、お燈明を灯す。神社係及び村役の人は夜通しお守りをする。また、男女の大厄、慶事の住民は大きな蠟燭と御神酒を奉納し、一年の安泰を祈願する。

元旦には、朝七時に宮田宮司が祝詞をあげられる。

金比羅宮 (五九字二八)

北谷の石マブの上に金比羅さんが祀ってある。天保年間に和田の者三人が小曾原金比羅宮に詣でお札をもらって帰ったが、お守り出来ないで返しに行くことにした。その夜三人とも夢を見て「このお札は返さないでくれ」とお告げがあった。そこで三人が相談して北谷の山頂へお堂を建てて祀ったという。



金比羅宮



春日神社神殿・拝殿

今でも天保七年六月十日（一八三六）のお札が残っている。この堂は円墳の上に建てられていると推定される。終戦後和田出身の福井市横山伊佐吉氏が報恩のため昭和三〇年頃に御堂を建て替えた。

金比羅宮は船の航海安全の神様であり、志津川地域に「三留郷」が発達して河川交通の安全を祈願して奉られたと思われる。

（青木先生の説）

祭神 大国主命（オオクニヌシノミコト）

祭礼 七月十日

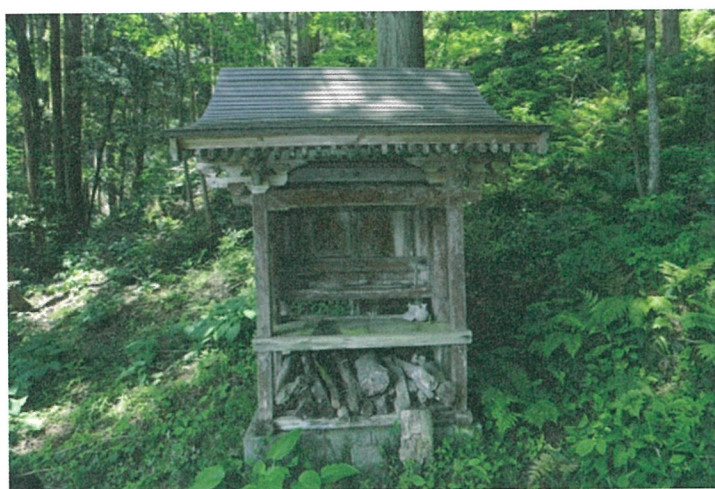
間口 一間 奥行 一間半

堂様・道場

村の中央西側小谷の中腹に横山惣左工門が建てた薬師堂がある。薬師如来・不動明王・多宝如来が祀ってある。この薬師如来は、字北谷にあった仏像で、不動明王は下の池の近くに、多宝如来は大切谷溜池下にあった仏像を合祀したもので、御堂を建てて安置してある。堂の上には大正三年七月二一日建立の大きな浄土三部経塔（阿弥陀経、勸無量寿経、無量寿経を三部経という）が建てられている。村人の信仰あつく詣でる人が多い。

弘法大師堂

横山豊家の後ろに、弘法大師が祀ってある御堂が建っている。この堂は元春日神社の社殿を大正四年（一九一五）改築の払い下げをうけた御堂で、横山家の氏神として祀っている。弘法大師の木像が安置されており、昔守屋長右工門と言う者が尊像を彫んで安置し礼拝したと伝えられている。祭礼は毎月二一日。



堂様・道場

庚申塔

春日神社の西の方、山の中腹に建っている庚申塔は、元禄一四年（一七〇一）二月二日猿和田村伝兵衛の寄進になる珍しい塔である。高さ一・二メートル余りの笏谷石に庚申（青面金剛）と二猿・二雛（ヒナ）が左右に彫っており、青面金剛は天邪鬼（アマノジャキ）をふまえている。

この庚申塔とよく似た塔が天下・竹生にも安置してあり、やはり元禄年間に建てられたものである。以前は次兵衛という人が所有していたが、今は田中和夫氏が所有している。

地藏堂

春日神社の入口に地藏堂が建てられている。この堂は村の入口辻堂に十坪程の土地があったが、明治四四年（一九一一）頃、現在地に移されたもので、今でも辻堂といっている。



和田 地藏堂



庚申塔

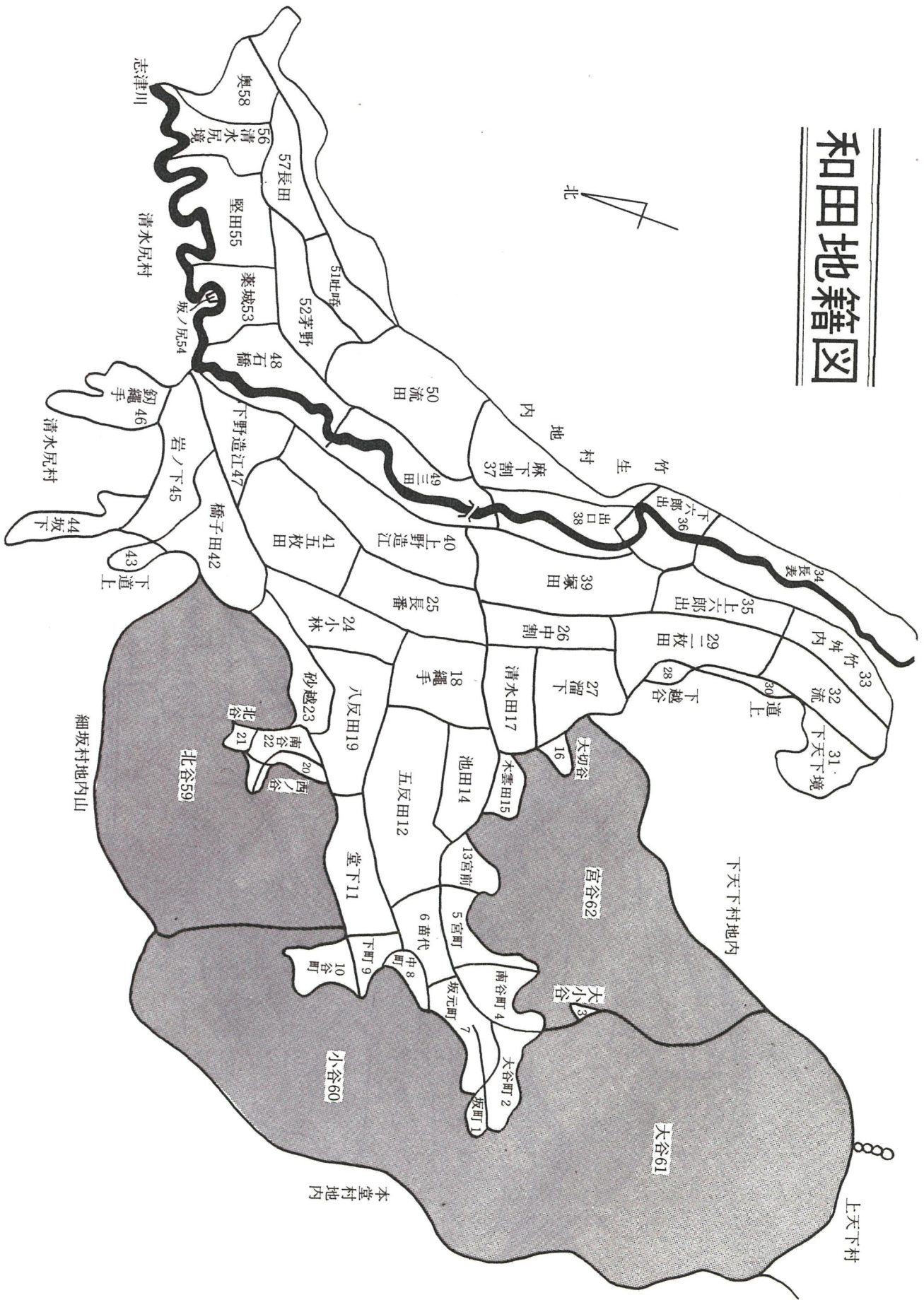


春日神社絵馬



春日神社絵馬

和田地籍図



東地区各神社の祭神名

天忍穗耳尊（アマノオシホミミノミコト）紀↓仲哀天皇

天児屋根命（アメノコヤネノミコト）

伊弉那美尊（イザナミノミコト）

伊弉諾命（イザナギノミコト）

伊邪那美尊（イザナミノミコト）

倉稻魂命（ウガノミタマノミコト）

大己貴命（オオナムチノミコト）

大田之命（オオタノミコト）

大軛和氣命（オオトモワケノミコト）記↓応神天皇

大宮比賣命（オオミヤヒメノミコト）

大日靈命（オオヒルメノミコト）

氣長足姫尊（オキナガタラシヒメノミコト）紀↓神巧皇后

神日本磐余彦尊（カムヤマトイワレヒコノミコト）紀↓神武天皇

猿田彦命（サルタヒコノミコト）

小名彦尊（スクナヒコノミコト）

武内宿禰命（タケウチノスクネノミコト）

建御雷命（タケワカイヅチノミコト）

武甕槌命（タケミカヅチノミコト）

玉依比賣命（タマヨリヒメノミコト）

足仲彦尊（タラシナカツヒコノミコト）紀↓仲哀天皇

帶中津彦命（タラシナカツヒコノミコト）紀↓仲哀天皇

比賣大神（ヒメオオカミ）

經津主命（フツヌシノミコト）

譽田別尊（ホンダワケノミコト）紀↓応神天皇

御食津大神（ミケツノオオカミ）

日本武尊（ヤマトタケルノミコト）

凡例 記（古事記）

紀（日本書紀）

東地区神社の祭神

○ 天忍穂耳尊 (アマノオシホミミノミコト) (杉谷)

仲哀天皇のこと。

正しくはまさかあかつかはやひあまのおしほみみのみこと正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命。須佐之男命がすさのおのみこと天照大神と誓約の時、大御神の左の御美豆良にあまてらすおおかみまく八坂瓊之やざかにのいはつのみすまる五百筒御統を乞いうけ、それを嚙んで吹き出した気から生まれた五男神中の一。天照大御神の命により葦原中国に降らうとした時、子のにぎのみこと邇邇芸命が生まれたので、乞いて替ってこれを天降らさせた。

○ 天兒屋根命 (アメノコヤネノミコト) (杉谷・和田・田尻栃谷)

【別名】 天兒屋根命 (アメノコヤネノミコト)

天白屋根命 (アメノウスヤネノミコト)

【神性・神徳】 祝詞の神、出世の神

岩戸隠れの際、岩戸の前で祝詞を唱え、天照大神が岩戸を少し開いたときに太玉命とともに鏡を差し出した。天孫降臨の際ニギに随伴し、中臣連などの祖となつたとされる。名前の「コヤネ」は小さな屋根の建物の意味で、託宣の神の居所のことと考えられる。中臣連の祖神であることから、中臣鎌足を祖とする藤原氏の氏神として信仰された。

○ 伊弉諾尊 (イザナギノミコト) (小羽)

【別名】 伊耶那岐命 (イザナギノミコト)

伊耶那伎命 (イザナギノミコト)

【神性・神徳】 創造神、万物を産み出す男神

(一) 伊邪那美尊と対偶の男性神で、伊邪那美尊との夫婦神

(二) 日本神話の男神。天神あまつかみの命をうけて、伊邪那美尊とともに高天たかまの原から下り、国生み、神生みをしたという男神。伊邪那美尊との夫婦神。

(三) 国生みを行った男神。神代七代の最後の神。天神の命で伊邪那美尊とともに大八洲おおやしまの国をはじめ、山・川・草木や万物を司る神々を生み、最後に天照大神、月つくよみのみこと読尊、素戔鳴尊、須佐之男命すさのおのみことを生んで、治める国を定めた。

○ 伊邪那美尊 (イザナミノミコト) (杉谷)

【別名】 伊弉郡美尊 (イザナミノミコト)

伊弉再尊 (イザナミノミコト)

伊弉册尊 (イザナミノミコト)

【神性・神徳】 創造神、万物を産み出す女神

高天原の神、神世七代の最後の二神。初めての夫婦神

○ 倉稻魂命 (ウカノミタマノミコト) (和田)

【別名】 宇迦之御魂神 (ウカノミタマノカミ)

【神性・神徳】 穀物の神、農耕の神、商工業の神

『古事記』では、須佐男の系譜において登場し、須佐男と神大市比売かむおおいちひめ (大山祇の娘)との間に生まれ、大年神は兄としている。

名前の「宇迦」は穀物・食物の意味で、穀物の神であり、稲荷神 (お稲荷さん) として広く信仰されている。

○ 大己貴命 (オオナムチノミコト) (杉谷・小羽)

【別名】 大国主神 (オオクニヌシノカミ)

【神性・神徳】 国作りの神 (文化神)、農業神、商業神、医療神

天の象徴であるアマテラスに対し、大地を象徴する神格でもある。

土地を開拓した土地神の意として、どの土地もこの種の神は存在したとする説がある。

○ 大田之命 (オオタノミコト) (和田)

神道五部書などによると猿田彦神の子孫。垂仁天皇の時、伊勢に到着した倭姫命に、五十鈴川上を天照大御神の鎮座の地であると教示し、土地を献じた。五十鈴川上の地の地主神であり、宇治土公の祖。興玉神の別称ともいふ。また、猿田彦神の別名といふ伝もある。

○ 大軛和気命 (オオトモワケノミコト) (小羽)

【別名】 品陀和気命 (ホンダワケノミコト)

応神天皇のこと。生まれた時、腕に軛のようなものがあつたためこの名がついた。この名は後に氣比大神に献じた。

【軛】・・・弓を射る時、左の手に着けるまるとい皮製のもの。

○ 大宮比賣命 (オオミヤヒメノミコト) (和田)

【別名】 大宮賣尊 (オオミヤメノミコト)

【神性・神徳】 市の神、食物の神

市場の産業に繁栄をもたらす市神である。この神は、京都の伏見稻荷大社に主祭神宇迦之御魂神うがのみたまのかみに付き従うようにして祀られている。もともとは宇迦之御魂神 (稻荷神) を祀る巫女だったが、のちに神格化されて大宮比賣命となった。

○ 大日靈命 (オオヒルメノミコト) (小羽)

天照大御神の別名。大は讚称。日はひる。夜をよると言うのと同じ。説文には靈は貴女の字とある。

○ 氣長足姫尊 (オキナガタラシヒメノミコト) (三留)

【別名】氣長足比賣命 (オオナガタラシヒメノミコト)

神功皇后のこと。古墳時代の皇族で、仲哀天皇の皇后、応神天皇の母

○ 神日本磐余彦尊 (カムヤマトイワレヒコノミコト) (三留)

【別名】神倭伊波礼毘古命 (カンヤマトイワレヒコノミコト)

日本神話以降に相当するとされる初代天皇、神武天皇のこと。

即位したとされる紀元前六六〇年二月一日は日本国が建国された日とされ、第二次世界大戦前は紀元節、戦後も建国記念日の日として祝日である。

○ 賀茂建角身命 かもたけつぬみのみこと

京都府賀茂御祖神社の祭神

神武天皇の東征にあたり天皇の御前に立ちのぼって、大倭の葛木山に宿っていたが、山城国の賀茂にいき京都を開拓した。

との間に、玉依日子、たまよりひこ 玉依日売、たまよりひめ 玉依日売を生む。

○ 猿田彦命 (サルタヒコノミコト)

【別名】猿田毘古神 (サルタヒコノカミ)

【神性・神徳】 導きの神、道の神、旅人の神

邇邇ににぎのみこと芸尊が天降りしようとしたとき、天の八街にたつて高天原から葦原中国までを照らす神がいた。その神の鼻長は八咫、背長は七尺、目は八咫鏡のように、またホオズキのように照り輝いているという姿であった。そこで天照大神と高木神は天宇受売命（アメノウズメ）に、その神の元へ行つて誰であるか尋ねるよう命じた。その神が国津神の猿田彦で、邇邇芸尊らの先導をしようと迎えにきたのであった。邇邇芸尊らが無事に葦原中国につくと、邇邇芸尊は天宇受売神に、その名を明らかにしたのだから、猿田彦を送り届けて、その名前をつけて仕えるように言った。そこで天宇受売神は「猿女君」と呼ばれるようになったという。

○ 小名彦尊（スクナヒコノミコト）（竹生・上天下・小羽）

【別名】 少名昆古那神（スクナビコナノカミ）

少彦名神（スクナビコナノカミ）

【神性・神徳】 医療の神、医薬の神。

一説には知恵の神であり、また、中国古代の強力な方士（幻術士）だったともいわれ、特に医療、医薬の知識は非常に優れたものだったという。

神功皇后も歌で讃えたように醸造の神としても知られる。

○ 武内宿禰命（タケノウチスクネノミコト）（三留）

【別名】 建内宿禰（タケノウチスクネノミコト）

『古事記』『日本書記』で大和朝廷初期に景行天皇けいこうから五代の天皇の時期に棟梁之臣・大臣として仕え、国政を補佐したとされる伝説的人物。気比神宮では気比神の石柱として奉られている。

○ 武甕槌命（タケミカツチノミコト）（和田・田尻）

【別名】 建御雷命（タケミカツチノミコト）（下天下）

【神性・神徳】雷神、刀劍の神、弓術の神、武神、軍神

『古事記』に登場し、神産みにおいてイザナギがカグツチの首を切り落とした際、十束劍「天之尾羽張（まめのおはばり）」の根元についた血が岩に飛び散って生まれた三神の二柱である。葦原中国平定において伊都之尾羽張の子と記述しているが伊都之尾羽張は天之尾羽張の別名である。

○ 玉依比賣命（タマヨリヒメノミコト）（下天下）

【別名】玉依姫尊（タマヨリヒメノミコト）

海神の綿津見大神の娘で、日子穗穗出見命（山幸彦）の妻・豊玉毘売命の妹であり、初代神武天皇の母。

玉は神霊、依は憑ること、神霊が憑りつく女性。つまり巫女のことである。

○ 足仲彦尊（タラシナカツヒコノミコト）（三留）

【別名】帶中津彦命（タラシナカツヒコノミコト）（小羽）

仲哀天皇のこと。

「古事記」「日本書記」に記される第十四代の天皇。

○ 比賣大神（ヒメノオオカミ）（和田）

【別名】姫大神（ヒメノオオカミ）

比売神（ヒメノカミ）

特定の神の名前ではなく、神社の主祭神の妻や娘、あるいは関係の深い女神を指すものである。比売大神は正確な神名も祀られた由緒も伝わっていないが、一説には養蚕機織の神と云われている。

○ 経津主命（フツヌシノミコト）（和田・田尻・上天下）

【別名】 斎主神（イワイヌシノカミ）、

伊波比主神（イワイヌシノカミ）

【神性・神徳】 刀剣の威力を神格化した神

『日本書記』の神産みの第六の一書では、伊弉諾尊が軻遇突智を斬ったとき、十束剣から滴る血が固まって天の安河のほとりの岩群となり、これが経津主神の祖であるとしている。神名の「フツ」は刀剣で物がブツツリと断ち切られる様を表すもので、刀剣の威力を神格化した神である。

○ 誉田別命（ホンダワケノミコト）（三留・清水）

【別名】 品陀和気命（ホンダワケノミコト）

【神性・神徳】 国家鎮護

十五代応神天皇のこと。实在性が濃厚な最古の天皇とも言われるが、仁徳天皇の条と記載の重複・混乱が見られることなどから、応神・仁徳同一説などが出されている。

父は先帝仲哀天皇で母は神功皇后とされるが、異説も多い。その理由は異常に出産が遅れたことによる。このような出生の神秘性は、本来応神天皇が前王朝との血縁上のつながりを持たず、新王朝の開祖であることを物語っているとするものもある。

信仰としては、八幡神として各地の八幡宮、八幡神社で祭神とされている。

○ 御食津大神 (ミケツノオオカミ) (三留・小羽)

【別名】 氣比大神である伊奢沙和氣大神 (イザサワケノオオカミ)
名義は御食物の大神

仲哀記によると、太子 (誉田別尊・後の応神天皇) が角鹿に禊 (みそぎ) に行った時、夢に伊奢沙和氣大神が現われて太子との名易を要求した。そして、名を易へた礼物として入鹿魚を賜ったことにより、御食津大神と称へられたとある。伊奢は誘うの意、沙は神稻、和氣は男子の敬称とされる。

福井県氣比神宮等の祭神

○ 日本武尊 (ヤマトタケルノミコト) (三留)

【別名】 小碓命 (オウスノミコト)

倭建命 (ヤマトタケルノミコト)

景行天皇の皇子で、仲哀天皇の父とされる人物。日本神話では英雄として登場する。記紀の記述によれば、二世紀頃に存在したとされる。実際には四世紀から六・七世紀頃の複数の大和の英雄を具現化した架空の人物という見方もある。

冊子に記載の主な天皇

神武天皇（初代）

和諡 神日本磐余彦尊 かみやまといわれひこのみこと 三留・氣比神社祭神

在位 紀元前六六〇～紀元前五八五

母 妃玉依姫尊 下天下・加茂神社祭神

九州を出てヤマトを征服した伝説的な初代天皇

『古事記』『日本書記』が伝える初代天皇。高天原から高千穂の峰に降り立った天照大神の子孫である。実在していたかどうかは定かではなく、教科書にも掲載されていない天皇の一人である。しかし、その存在感は現代でも大きく、即位日が昭和に建国記念日（明治には紀元節）として制定されるなど、影響力を保ち続けている。

仲哀天皇（第一四代）

和諡 足仲彦尊 たらしなかつひこのみこと 三留・氣比神社祭神

在位 西暦一九二～二〇〇

父 日本武尊 やまとたけるのみこと

后 氣長足姫尊 おきながたらしひめのみこと（神功皇后） 三留・氣比神社祭神

子 応神天皇

神功皇后の夫として知られている。日本武尊の第二子。第一三代成務天皇に嗣子がなかったので立太子した。

神功皇后は氣長宿禰王 おきながのすくねのおおわかみ（開花天皇の玄孫）の娘で、名を氣長足姫尊 おきながたらしひめのみこと といった。近江息長（滋賀県米原市）の生まれである。

一説では、神功皇后は卑弥呼だったといわれているが、実在については議論が多く定説がない。都は第一二代景行天皇、第一三代成務天皇に続いて志賀の高穴穗宮にあった。

なお、「日本書記」では仲哀天皇の死後、神功皇后を天皇と同格に扱っている。

おうじん
応神天皇（第一五代）

和諡 ほんだわけのみこと 誉田別尊 三留・氣比神社祭神、清水・八幡神社祭神

在位 西暦二七〇～三一

父 仲哀天皇

母 神功皇后

后 なかつひめのみこと 仲 姫 命

子 仁徳天皇

大陸と接近し、多様な文化を取り入れる。

仲哀天皇の第四皇子で、神話的要素を含む天皇ではあるが、多くの歴史学者により「確実に実在が確かめられる最初の天皇」とされている。五世紀初頭前後の時代は、日本の軍が盛んに朝鮮半島へ侵攻したという記録がある。この指揮を執ったのが、実は応神天皇だった可能性が大きいとされる。

大陸との接近を映して新羅、百済との交流も活発化した。応神天皇は渡来系の氏族を積極的に受け容れ、文化・技術を取り入れた。有名な秦氏（島津氏、長宗我部氏の祖とされる）、漢氏（坂上田村麻呂の祖）の渡来もこの時代である。

げんしょう
元正天皇（第四代）

和諡 やまとねこたかみぎよたらしひめ
日本根子高瑞淨足姬天皇

在位 西暦七一五～七二四

父 草壁皇子

母 阿部皇女（元明天皇）

「養老律令」『日本書記』を成立させた。

七世紀から八世紀にかけて、草壁皇子、文武天皇が病弱で、若年で亡くなったことから、女性天皇が相次いで誕生した。元正天皇もそのひとり。中継ぎの天皇とみられている。養老二年（西暦七一八）、政権の実力者・藤原不比等ふじわらふひとらによって、大宝律令を改訂した「養老律令」の編集が終わり、養老四年（西暦七二〇）、舎人親王とねりらが編集した史書「日本書記」が完成。日本初の正史となった。

関連信仰について

① 稲荷いなり信仰

食物、農耕、諸産業の神

総本社 京都伏見区の伏見稲荷大社

稲荷神は「お稲荷さん」と呼ばれ、人々からもっとも親しまれている。稲荷神社は全国に三万七五〇余社あるという。全国の神社の総数が一万余社といわれているから、稲荷神社はその三分の一をしめていることになる。

伏見稲荷大社の最も重要な聖地の一つは稲荷山である。この山と稲荷社の創造について「山城国風土記」逸文に縁起があり、それによれば秦公伊呂具という人が餅を的にして矢を射ったところ、その餅が白鳥となって山の峰に止まり、そこに稲が生えたので、不思議に思っ神社を建て、伊奈利と名づけたとある。

稻荷信仰における難問の一つは、神使を狐とすることである。稻荷神と狐が結びついた理由については、諸説があり、いまだ定説をみない。一説に、稲の穂と狐の尾とが似ていることによるといい、また稻荷神社に祭る宇迦之御魂大神の別名が「ミケツ神」であり、それを「三狐神」とあてたので、狐に付合されたともいう。しかし、いずれも納得できる説ではない。

② 春日信仰

藤原氏の氏神、雷神、竜神

総本社 奈良市の春日大社

春日神を祭る神社は、現在、全国におよそ三〇〇〇余社ある。

春日神社の総本社である奈良の春日大社には、四座の神々を祭り、その第一殿にはた武甕槌命けみかつちのみこと、第二殿には径津主命ふつぬしのみこと、第三殿には天兒屋根命あまのこやねのみこと、第四殿に比売神ひめのかみを祭る。これらを総称して、春日四所明神ともいう。これらの四神は藤原氏の守護神であり、代々藤原氏によつて祭られてきた。藤原氏は天兒屋根命の子孫と伝えられており、したがって春日信仰は藤原氏の氏神を中核としている。

③ 八幡信仰

源氏の氏神、国家鎮護の神、武家の守護神、武神

総本社 大分県宇佐市の宇佐神宮（宇佐八幡宮）

鎮守の森といえは「八幡さん」といわれるほど、八幡神は各地にまつられている。全国に鎮座する八幡宮・八幡神社は二万五〇〇〇社を数える。

祭神は応神天皇・比売大神・神功皇后である。当宮の古縁起によると、欽明天皇の御代に豊前国（大分県）宇佐郡馬城峰（御許山）へ八幡神が顕現し、ついで神龜二年（西暦七二五）正月に現在地の小椋山へ遷座したとある。これが宇佐神宮の起源と伝えられている。

八幡信仰は、さまざまな要素から構成されており、しかも多岐にわたっている。

おそらく農業神信仰に起源するであろうが、宇佐八幡宮では他の神社に先がけて仏教と習合し、養老四年（七二〇）、はやくも仏教儀礼に由来する放生会ほうじょうえが行われた。この祭りは仏教の殺生禁断の思想に基づき祖霊を追善供養する、八幡信仰でもっとも重要な儀式である。そして鎌倉時代になると、八幡宮は源氏の氏神となった。康平六年（一〇六三）八月、源頼義は相模由比郷にひそかに石清水八幡宮の分霊を勧請した。これが鶴岡八幡宮の創祀である。

④ 天神信仰

雷雨の神、御霊神、学問の神、文教の神、連歌の神、和歌の神、書道の神

総本社 福岡県太宰府市の大宰府天満宮

京都市上京区の北野天満宮

菅原道真（八四五〜九〇三）を神格化した神社で、全国に一万四四一社を数える。祭神の道真は、官公、官丞相と称され、平安時代前期の学者・政治家であった。延喜元年（九〇一）藤原時平の讒言により太宰権師に左遷され、二年後の延喜三年二月二五日、悲運のうちに配所で没した。延喜五年にその遺骸の上に廊所を建て、その霊を祭ったのが大宰府天満宮の創祀である。

ところで、道真の没後、不穏な出来事が続き、なかでも延喜年間に起きた藤原時平一族の一連の不幸は道真の怨霊のたたりであるといわれた。そして、ついにその怨霊は火雷天神となって宮中に落雷した。

鎌倉時代以降、天神縁起が数多く作られ、天神の霊験や利生が世に広く伝えられた。そこでの天神は御霊神や託宣神のほかに慈愛の神、正直の神、そして無実の罪を晴らし、身の潔白を明らかにする雪辱の神として語られている。

⑤ 白山信仰（一）

水の神、農耕の神、死霊信仰

神徳・・・五穀豊穰・子孫繁栄・良縁成就

総本社 石川県白山比咩神社

白山妙理権現

【別名】白山比咩大神（ハクサンヒメノオオカミ）

全国二七〇〇の社に勧請されている女神

白き神々の峰として崇められた白山は、多くの霊峰と同様、古くは人間が足を踏み入れることを許さない禁足の山だった。そこに分け入ったのが、「越の大徳」と呼ばれた泰澄で、次のような伝承が伝わっている。

越前や加賀の窟で修行に明け暮れていた泰澄は、あるとき女神の示現にあい、「私は白山妙理権現である。私の真の姿が見たければ白山山頂に来たれ」と告げられた。女神に導かれ、ついに人跡未踏の山頂に到着した泰澄。山頂近くの「転法輪の岩屋」にて祈りを凝らすと、翠ヶ池から火を吹きながら九頭竜があらわれた。その姿に満足できなかった泰澄がさらに祈ると、龍はその身を変じ、女神の本地仏である十一面観音が神々しい姿であらわれた。

白山は古来、里の水源の場であり、祖霊が鎮まる場だった。そこに君臨した神は、水の霊力をつかさどる龍神であり、黄泉国（死者の世界）の主宰神である女神だった。そこに、それらを超える「カミ」として、当時、靈験仏として脚光を浴びていた十一面観音がもたらされた。

祭神は伊弉册尊、境内社の越南地社（祭神 大己貴尊）・別山社（祭神 天忍穗耳尊ほか三柱）と合わせて白山三所大権現と総称する。

白山は、山岳信仰の一大拠点としてあまねく知られており、天徳元年（西暦九五七）成立の「泰澄和尚伝記」に、養老元年（西暦七一七）越の大徳泰澄大師によって開かれたと伝えられる。

同書によれば、大澄大師は越前麻生津の三神氏の出で、大化元年（六四五）越知山に登って日々白山を仰ぎつつ修行に励み、やがて白山開山の志を立て、ついに伊弉册尊の影向と神託を受けて三六歳で大望をとげ、八六歳で入寂したという。この泰澄大師の存在については疑問視されることが多いが、宮内庁書陵部所蔵の「法隆寺一切経」奥書に天平二年庚午六月七日泰澄」とあり、右の伝記の真偽は別として奈良時代に泰澄なる人物が実在したことは明らかである。

白山信仰の特色は、禅定（靈山登頂して修行すること）の場たる白山山頂に至る経路上に、本宮↓中宮↓中居↓山頂本社という登拝拠点があるがもうけられていたことである。平安初期には白山の登山口として、加賀・越前・美濃に各一か所の馬場が形成され、禅定場（修行のための登拝道）もそれぞれ整備された。

馬場とは、白山寺が白山比咩神社を中心に形成した加賀馬場、勝山市の平泉寺が白山中宮を中心に形成した越前馬場、長瀧寺が白山中宮を中心に形成した美濃馬場の三馬場をいう。この三馬場が全国の信者を吸収して今日に至る白山信仰を発展させたのである。右に述べたように、白山信仰は本宮↓中宮↓中居↓山頂本社という独自の形態をもつが、これを越前に当てはめた場合、本宮は丹生郡越前町の越知神社（旧大谷寺）、中居は伊野原（勝山市猪辺付近）と推定される。

⑥ 加茂信仰

平安京の守護神として崇敬を集める

下鴨神社と上賀茂神社の正式名は、賀茂御祖神社と賀茂別雷神社である。

これら両社を総称して賀茂神社といい、京都最古の神社である。また賀茂神社の祭というが、一般には葵祭の名で知られている。葵祭は

京都三大祭りの一つである。下鴨神社には、母神である玉依媛命と祖父の加茂建角身命を祀り、上賀茂神社には加茂別雷大神を祀る。賀

茂一族の氏神であり、賀茂氏によって代々祀られてきた。「山城国風土記」逸分によれば、玉依媛命が賀茂川の河原で遊んでいると、上流

から丹塗矢が流れて来た。

玉依媛命が、その矢と結婚して生まれたのが、賀茂別雷大神である。京の守護神として皇室の崇敬は厚く、平安京遷都のさいには成功祈願が行われている。上賀茂神社は、市内北部の賀茂川の東に、一方の下鴨神社は賀茂川と高野川の合流地点の北に鎮座する。本殿は流造で国宝である。

神社関連信仰施設

地藏堂

地藏菩薩を本尊とする仏堂の呼称。

地藏菩薩は、釈迦の没後、弥勒仏が出現するまでの無仏の期間、六道で苦しむ衆生を教化・救済する菩薩。日本では平安時代から広く信仰されるようになった。密教などでは菩薩形をとるが、一般には左手に宝珠、右手に錫杖を持ち、頭を丸めた僧形の像で親しまれる。

六道の救済に当たることから六地藏の信仰が生まれた。また、子供を守り、幼くして死んで賽の河原で苦しむ子供を救済すると信じられて、子守地藏、子育て地藏などが生じた。

観音堂

観世音菩薩を本尊とする仏堂の呼称。

世の人々の音を観じて、その苦悩から救済する菩薩。

人々の姿に応じて大慈悲を行ずるところから千変万化の相となるといい、その姿は六観音・三十三観音などと表される。また、勢至菩薩とともに阿弥陀仏の脇侍で、宝冠の化仏をつけ、独尊としても信仰される。

観音経というお経の中に、観世音菩薩のご利益が書いてあり、お祈りをすると、三十三の姿に形を変えて、「七難」を救うと言われる、火災による災難、川や海などで溺れて死ぬ災難、台風や竜巻で死ぬ羅殺難、人に刺されて死ぬ災難、死霊による災難で死ぬ悪鬼難、牢獄にとらわれる枷鎖難、人に恨まれ殺されたり、物を取られたりする怨賊難による災いから人々を救うという。

薬師堂

薬師如来を本尊とする仏堂の呼称。

薬師如来は大乗仏教において病氣平癒等の現世利益に効験のある仏として信仰されており、アジアの仏教圏の中でも特に日本で広く信仰を集めている仏であることから、日本では薬師如来を本尊とする寺院や薬師如来を祀る仏堂が各地に数多く存在する。

薬師如来（菩薩）は神仏習合の時代に大己貴命と少彦名命を祀った仏教的称号

弥勒堂

弥勒菩薩を本尊とする仏堂の呼称。

兜卒天とそつてんの内院に住み、釈迦入滅から五六億七〇〇〇万年後の未来の世に仏となってこの世にくんだり、釈迦にかわって衆生を救済するといふ菩薩。日本には飛鳥時代に伝来、平安時代には弥勒浄土信仰が盛んとなり、修験道にもとりいれられた。

金比羅宮

舟の航海安全の神様であり、東地区では和田にあり、これは志津川流域に「三留郷」が発達していたことから、志津川を農業用水として使用し、その恩恵を受けて、この地域の米作りが二千数百年にわたって繁栄し、農産物の運搬手段として舟が使用された。

不動堂

不動明王を本尊とする仏堂の呼称

密教の根本尊である大日如来の化身、あるいはその内証（内心の決意）を表現したものであると見なされている。大日大聖不動明王、無動明王、無道尊、不動尊などとも呼ばれる。アジアの仏教圏の中でも特に日本において根強い信仰を得ており、造像例も多い。真言宗では大日如来の脇侍として、天台宗では在家の本尊として置かれることもある。縁日は毎月二八日である。

日光菩薩・月光菩薩

日光菩薩は日光遍照菩薩とも呼ばれ、太陽の如く光を照らして苦しみの闇を消すと言われています。一方、月光菩薩は月光遍照菩薩と呼ばれ、月のようなやさしい慈しみの心で煩惱を消すといわれています。基本は薬師如来の脇侍で、向かって右が日光菩薩・左が月光菩薩で三尊で並び独尊で祀られることはない。日光菩薩と月光菩薩は鏡を見ているようにそれぞれ対照的に造られていることが多い。また、決まった形というのは無く、立ったり座ったりしているが、手にはそれぞれ日輪と月輪を持っている。見分けが付きにくいのが、左手が上がっている造形が日光菩薩である場合が多い。

庚申こうしん

暦の上で十干十二支といわれる十と十二の二つの組合せが庚（ミズノト）申（サル）になった日を「庚申」と言い、六〇日目・六〇年目に一回まわってくる。この日に庚申を祀る行事が行われる。

中国から伝わった庚申信仰は中国の道教という宗教の中に三戸説というのがある。これは人間の身体の中に三戸という三匹の虫がいて、庚申の夜に人が寝静まってから天に昇って天の神に人の罪過をつげにいくと言う。三戸は、形はないけれど実は、鬼神や靈魂のたぐいで、人間が死ぬと三戸は鬼となって勝手に遊びに歩いたり、まつりを受けたりすることが出来るので、常に人の早死を望み、庚申の日ごとに人が眠っている中に天に昇って行って、人間の過失や罪を上司の神に告げ口をする。この三匹の虫については、中国の古い書物には胃虫・回虫・寸白虫といい、又は長虫・赤虫・ぎょう虫というを書いてある。恐らくこの三戸神は人間の身体にいる寄生虫が、一命をとることもあるので、人間の靈魂と結びつけ三戸説が生まれたのではなからうか。

庚申塔の建立

室内に祀って庚申待をする青面金剛が、屋外に石像として建てられるようになったのは、庚申を供養して、現世未来の安楽を祈り、または諸願成就のために造立されたものと思われる。下天下の庚申塔は願主「任海」、和田のは「田村伝兵衛」の寄進、竹生の庚申塔は「大乘院」が建てたものである。二猿と二雛が浮彫りしてある。普通は三猿であるが、上の方に彫られてある二童子にならって、二猿にしたのかもしれない。その下に彫ってある二雛は、雌雄の二羽で「雛の鳴くまで待つ」という意味であるとする説がある。

黄泉の国^{よみ}

地下にある死者の世界である。後期古墳の横穴式石室そのままの描写であり、死体のあったのは玄室。

石^{こく}について

一石は成人が一年間に消費する量にほぼ等しいと見なされ、示準されてきた。面積を表す日本の単位である反は、元は米一石の収穫が上げられる田の面積として定義されたものであった。

明治時代を迎え、米一俵が四斗と規定されて、二・五俵が一石となった。

また、メートル法を採り入れるにあたっては、日本では明治十九年の条約批准後、メートルを基準にして一升は約一・八〇三九リットルと定められ、よって一石は約一八〇・三九リットルということになった。

神社に係る言葉辞典

祭神

◎ 自然神

自然現象・気象神↓太陽、月、星、雷、嵐、風、霧など。

動植物神↓樹木、龍、狼、蛇、狐、狸など。

地理・地形・地名神↓山、海、野、川、谷、大地、石など。

◎ 人格神

皇祖・皇族神↓歴代の天皇・皇族。

祖先神↓氏神、氏族、家の祖先。

英雄・功労者神↓戦争や治世などに功績のあった人物。

文化・学術神↓すぐれた文化的業績を残した人物。

御霊神↓非業の死を遂げた天皇・皇族、公家、武士、義民など。

◎ 天地創造神↓国土創造の神など。

霊能神↓とくに際立つ霊能力をもつ神。

職能神↓特定の職能を守護する神。

食物神↓食そのものの神格化、また食をつかさどる神。

氏神

● 地域社会の氏神

同じ地域に居住する人々が共同で祭る神、および祭る社を氏神ないし氏神社という。

● 一家の氏神

一家とは血縁による同族・一族であり、マキ、一門などとも呼ばれる。その血縁者のみが祭るもので、血縁氏神とか同族神ともいう。

● 屋敷の氏神

個人の家の屋敷内に祭るもの。家の氏神とか屋敷神などともいう。

玉串

正式参拝のときに、参拝者は神職から神前にささげる榊さかきの小枝を受ける。これを玉串という。この玉串を神前にささげて拝礼することが

玉串奉奠たまぐしほうてんである。玉串は榊さかきの小枝に紙垂しでや木綿ゆゆうをつけたものである。これは布刀玉命ふとたまのみことが天岩屋あめのいわやの戸の前にささげた「根付きの賢木さかき」を簡略化したものといわれている。

かしわで

拍手

拍手の意味は、両手を合わせて打つことにより心を統一し、神に敬意を表すことで、さらにいえば、拍手を打つことにより左と右という対立する世界を打ち消して一つの世界に入るのである。

建築様式の流造

屋根に反りをつけ、とくに前流れを長くして向拝としたもので全国の神社の本殿にもっとも多く見られる様式である。その代表的なのは京都の賀茂御祖神社や賀茂別雷神神社の本殿である。

てしし

手水舎

手水舎は「おみずや」「御手洗みたらし」ともいっており、神に近づいて参拝をするに、心身の穢けがれを洗い清めるために行う。

ご神体

別名、「御霊代」^{みたましろ}「御正体」^{みしょうたい}「御体」^{ぎよたい}などという。ご神体は鏡が多い。ほかに剣、玉、鉾、神像、影像、御幣などもある。

狛犬

狛犬は、魔除け、神前守護のためといわれている。狛犬は左右一対であり、向って右が口を開けた阿形^あ、左が口を閉じた吽形^{うん}の「阿吽」形式が一般的である。狛犬と寺院の山門に置かれている仁王とは相通ずるものがある。また、「子取り」と「玉取り」で対をなしている狛犬もある。前足で子どもをあやしているのが、「子取り」、玉を押さえているのが「玉取り」である。

しめ縄

神社は神のために設けられた空間である。そこは神霊^{みたま}が鎮まっている神聖で清浄な場所なので、しめ縄を張ってある。しめ縄を張る意味は、そこへ人間が足を踏み入れないようにするためである。しめ縄の紙垂^{しで}と紙垂との間に垂らした藁製^{わらせい}の飾りを「注連の子^{しめめ}」という。

鈴

鈴の音には魔除けの霊力があると信じられてきた。神事の中でも鈴を鳴らす所作がみられる。巫女が神楽を舞うときにも小さな鈴を振る。一説に、鈴を振るのは神霊を招く所作であるという。神社で鈴を鳴らすのは、これから祈願をするための合図であるとも説明されている。

榊

榊^{さかき}という字は、「神」と「木」という字を合わせて作った国字（日本製の漢字）で、神の木、聖なる樹木という意味である。神が占有する聖なる土地と、俗なる人間の土地、すなわち神の聖域と人間の俗界との境界に植えられた樹木である。このように、境の木が転じて榊となったとの説が有力である。榊は神霊のよりつく神聖な樹木で、これを、神前に供えたり、また、玉串といって榊の小枝に木綿^{ゆう}や紙垂^{しで}をつけて拝礼するとき神前にささげたりする。このように、常緑樹である榊をささげるのは、一年中緑を保ち、神の枯れることのない恩恵をいただくためであると説明されている。

おみくじ

「おみくじ」は「御神籤」と表記する。古代、まつりごとの重要な決定にあたり、神意をうかがうためにくじ引きをおこなった。これがおみくじの起源であるとされ、神道神社独特のものである。現在ののような参詣者一般向けの形となったのは鎌倉時代であるとされる。のちに寺院でもこれをまねて行なわれるようになった。寺院では御仏籤と表記している。

お神輿みこし

神輿は、狩猟と採集による移住を繰り返した時代に行われた収穫祭の祭壇が起源とされ、このときは祭りが終ると神輿は取壊され、毎年新たな神輿を作って天上の神を招いていた。農耕が始まり人々が定住するようになると、神に対しても定住が求められるようになり、居所としての神社が誕生した。そして神の乗り物として神輿が継承され、現在のような形になったといわれている。

元々「輿」は貴人の乗り物を指したが、平安時代中期頃から怨霊信仰が盛んになり、神輿を運ぶ物として「みこし」が使われるようになったとされる。

幟のぼり

昇旗の異称。本来は神霊の依代よしろ（神霊が現われる時の媒体となるもの）として立てたもので、常緑の青葉をつけた高い柱や竿を立て、布の一端（乳）をつけてひるがえした。これを幡といい、すでに「万葉集」や「古事記」にみえる。この幡を軍陣に多く用いるようになると、幡が風によってよじれ、標式の用を欠いた。室町時代に竿先に折りかけの金具をつけ、それに幡の紐を結びつけ、幡の左縁に一定間隔に布や革の輪を取り付けて竿に通した。この輪が梯子のように見え、幡が風によって上下するところから「のぼり」と呼ぶようになった。

鳥居

鳥居の起源については諸説あり、考古学的起源についてはつきりしたことは分かっていない。単に木と木を縄で結んだものが鳥居の起こりであると考えられる。文献に徴すれば古くは「於不喜御門」うへふかすのみかど（皇太神宮儀式帳）と称して、奈良時代から神社建築の門の一種としていっている。いずれにせよ、八世紀頃に現在の形が確立している。

そのほか主要な説として、天照大御神を天岩戸から誘い出すために鳴かせた「常世の長鳴鳥」とこよながなきどり（鶏）に因み、神前に鶏の止まり木を置いたことが起源であるとする説がある。

左義長（どんど焼）

もとは毬杖を三本立てた三毬杖ぎちせうから起こるといわれる。鳥追行事と結合していたところから、三木張の説、爆竹を三又に組んだものをいうから山鬼打の説がある。正月の門松、七五三飾、しめ飾り、書初めなどを持ち寄って焼く。火に正月の書初めをかざして高く書紙が舞うと書が上手になるとか、火に体をあてると若返るとか、体が丈夫になるといわれる。また、その火で焼いた餅や団子を食べると、年中の病気を除くともいわれる。火を神聖視する信仰が結びついた行事である。

絵馬

祈願または報謝のために、神社、寺院に奉納する馬の絵を描いた額。

往古で生馬を神に献じた風習が次第に木馬、土馬、紙馬などで代用され、これが平安時代から絵に描いた馬に代ったもの。後には馬以外の絵も描くようになった。

世帯数・人口の推移 (村の明細帳より)

(平成二七年は七月一日現在)

小羽

宝永三年 (西暦一七〇六) 家数・三二戸、人口・一五〇人
安政七年 (西暦一八六〇) 家数・四六戸、人口・二二六人
明治二四年 (西暦一八九二) 家数・四〇戸、人口・二二九人
大正九年 (西暦一九二〇) 家数・三四戸、人口・一五三人
昭和一〇年 (西暦一九三五) 家数・三〇戸、人口・一三四人
昭和三〇年 (西暦一九五五) 家数・二八戸、人口・一四三人
平成二七年 (西暦二〇一五) 家数・三五戸、人口・一〇九人

上天下

宝暦四年 (西暦一七五四) 家数・四六戸、人口・一七二人
明治二四年 (西暦一八九二) 家数・四三戸、人口・二〇七人
大正九年 (西暦一九二〇) 家数・四八戸、人口・二三七人
昭和一〇年 (西暦一九三五) 家数・四六戸、人口・一七八人
昭和三〇年 (西暦一九五五) 家数・四九戸、人口・二三四人
平成二七年 (西暦二〇一五) 家数・五五戸、人口・一八八人

下天下

明治五年 (西暦一八七二) 家数・四七戸、人口・二八九人
明治二四年 (西暦一八九二) 家数・四二戸、人口・二三一人
大正九年 (西暦一九二〇) 家数・四二戸、人口・二二四人
昭和一〇年 (西暦一九三五) 家数・四二戸、人口・二〇五人
昭和三〇年 (西暦一九五五) 家数・四三戸、人口・二一九人
平成二七年 (西暦二〇一五) 家数・三九戸、人口・一五一人

三留

明治二四年 (西暦一八九二) 家数・八〇戸、人口・四一三人
大正九年 (西暦一九二〇) 家数・七三戸、人口・三七一人
昭和一〇年 (西暦一九三五) 家数・六四戸、人口・三一四人
昭和三〇年 (西暦一九五五) 家数・六九戸、人口・三三二人
平成二七年 (西暦二〇一五) 家数・七七戸、人口・二四五人

和田

宝暦十一年（西暦一七六一）家数・七七戸、人口・三三六人
明治二十四年（西暦一八九二）家数・六一戸、人口・三二〇人
大正九年（西暦一九二〇）家数・四八戸、人口・二二三人
昭和十一年（西暦一九三五）家数・三六戸、人口・一八四人
昭和三十一年（西暦一九五五）家数・四一戸、人口・一九一人
平成二十七年（西暦二〇一五）家数・四一戸、人口・一五〇人

杉谷

文久二年（西暦一八六二）家数・百四戸、人口・五五七人
明治二十四年（西暦一八九二）家数・九七戸、人口・五〇一人
大正九年（西暦一九二〇）家数・九二戸、人口・四五七人
昭和十一年（西暦一九三五）家数・八七戸、人口・四二五人
昭和三十一年（西暦一九五五）家数・八一戸、人口・三九九人
平成二十七年（西暦二〇一五）家数・六九戸、人口・二五八人

田尻栃谷

安永三年（西暦一七七四）家数・四八戸、人口・二二〇人
明治二十四年（西暦一八九二）家数・四〇戸、人口・二〇七人

大正九年（西暦一九二〇）家数・三七戸、人口・一七八人
昭和十一年（西暦一九三五）家数・三四戸、人口・一八五人
昭和三十一年（西暦一九五五）家数・三二戸、人口・一九二人
平成二十七年（西暦二〇一五）家数・二九戸、人口・一一一人
（ホープタウン）
家数・九八戸、人口・三四六人

竹生

明治二十四年（西暦一八九二）家数・六三戸、人口・三一九人
大正九年（西暦一九二〇）家数・五二戸、人口・二五七人
昭和十一年（西暦一九三五）家数・四六戸、人口・二一六人
昭和三十一年（西暦一九五五）家数・五〇戸、人口・二五二人
平成二十七年（西暦二〇一五）家数・五四戸、人口・二〇一人

清水

明治二十四年（西暦一八九二）家数・五〇戸、人口・二五八人
大正九年（西暦一九二〇）家数・四一戸、人口・二〇七人
昭和十一年（西暦一九三五）家数・三六戸、人口・一八四人
昭和三十一年（西暦一九五五）家数・四一戸、人口・一九一人
平成二十七年（西暦二〇一五）家数・三四戸、人口・一三三人

歴史アドバイザー

上天下 芦野喜義

下天下 小川照雄

小羽 中下 肇

三留 尾崎清治

清水杉谷 仲橋保道・見寺義弘・辰村和男

田尻栃谷 竹内良一

竹生 吉田憲也

清水 高松英明・川上克博

和田 上田清信

写真撮影

清水杉谷 竹内 進

竹生 向出隆一

清水東公民館社会部

宮永節子、宮永禎夫、高橋ふみ代、松原佳和、竹内良一、横山智恵博

参考文献

清水町史（発行所 清水町教育委員会）

地籍図について

地租改正のため明治八年から一〇年にかけて作成されたもので、村絵図を写したものである。縮尺は記載なし

編集後記

当初、この冊子の企画は、元福井県立朝倉氏遺跡資料館館長の青木豊昭先生の歴史講座を開催したことから始まりました。

清水東地区で生まれ育っても、あらためて聞かれると知らないことがたくさんあります。特にその地区に入られた皆さんには尚更では無いかと思います。

歴史的なことはもちろん、自分が見聞きしたことでも記憶違いや思い込みがあります。ふるさとを愛するということは、先人がたどった道を知ることであり、地元のことを正しく理解することではないでしょうか。特に、この東地区にも地域の方々が昔から守ってきた立派な神社があります。自分の地区の神社や御神体のことについて知って頂きたい、東地区公民館社会部の活動事業として作成いたしました。この冊子作成にあたり、各地区一二名の歴史アドバイザーの皆さんには原稿作成から数回にわたる編集会議、神社の案内と説明をして頂きました。また、神社の撮影は東公民館写真クラブ会員さんのご協力も頂きました。

関係者の皆様には大変お世話になりました。厚く御礼を申し上げます。最後に、この冊子を参考に東地区の各神社を訪ねて下されば幸いです。

清水東神社誌

発行日 平成二八年三月

編集・発行

清水東公民館社会部

印刷 合同会社 TEAM-T

福井市田尻栃谷町一―二三

TEL 〇七七六―四三―〇二八九

